
シェールのシュヴァリエ 2

岩戸 勇太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シェールのシュヴァリエ 2

【Nコード】

N8415R

【作者名】

岩戸 勇太

【あらすじ】

ラタとノエリアを仲間にしたシェール達。

レイグネンを散策していると、金髪金瞳のエイディエルというウオーリア達に襲われる。

プロローグ

落葉の季節が終わり、まだ町中で落ち葉が掃除をされないで残っている。 当一の家の狭い庭とて例外ではない。春の風情を感じるために庭に設置されているサクラの木から落ちた葉が、庭一面に敷き詰められているのだ。いつもの麦藁帽子に上下ジャージという姿で、ラタ・ヴェンターがほうきを持って庭に出ていた。 祥子がそれに声をかける。「ラタちゃん。それではお願いしますね」「任せてください。ただ、約束のヤキイモは忘れないでくださいね」「もちろんですよ」 庭にある落ち葉を掃除したら、ヤキイモを食べさせてあげるという約束で、ラタは庭掃除の約束をしたのだ。 ラタは一度食べてから、あの甘さとふつくらとした舌触りに心底感動をして何かにつけて祥子にねだるようになっていたのだ。 腰にまで届きそうなほどに伸ばした黒い髪を揺らしながら。ラタは、箒をふって落ち葉をかき集める。いつもどおり、眠そうにも見える半目をしているが、口元はニコリとしており楽しそうな様子であった。庭の草は、もう手入れをして抜いてあり、箒をふるだけで、スムーズに落ち葉が集まっていく。

リーシア・ドローラーは、フラスコをアルコールランプで熱して、黒くて粘りけを持つ液体をグツグツと煮立たせていた。

屋根裏部屋を改修してつくったこの部屋は、リーシアが壁紙を張替え、床板まで新しいものを貼り付けた。

元が、倉庫として使われていた屋根裏部屋であるとは見えないほど、綺麗で清潔な部屋になっている。

少し前までは鋭かったリーシアの目元は、最近になって少しだけやわらかくなってきている。魔術のために背中まで伸ばした紫色の髪に、もみあげから垂れ下がった髪。 模様の描かれたローブを着ており、ファンタジー世界の魔術師であるというのが見て分かる姿

だ。怪しい薬でも作っているように見えるが、これはただの腰痛の薬だ。冬の寒さが完全にやってきて、関節や腰に痛みを訴える人間も多くなってきた。秋の頃からすでに大量に注文をされていた薬の量は、倍以上の量になっている。薬の製作を依頼され、最初はぶつくさ言っていたリーシアも、すでに諦めている。すでに様子に向けて、薬を製作するための釜を用意するように注文をしている。『いままで以上の量を作ってくれるならいいですよ』そう、様子は言っただけ承をいた。だがどうせ、釜の注文をするまでもなく量はどんどん増やされているのだ。どうせなら一気に作れるほうがいいに決まっている。「十二番のビンを取って」リーシアが言うのと、それに反応したエプロンドレスを着た女の子が動く。ノエリアという名前の彼女は、褐色の肌に銀色の髪。しずしずとした物腰の彼女は、戸棚を空けてリーシアの元までビンを持ってくると、また元立っていた場所に戻って姿勢を正して次の指示を待っている。よく訓練をされた使用人の姿であった。

台所に二つの人影がある。シチューを煮込みながらかき混ぜている姿と、ボウルの中の液体をかき混ぜている姿だ。「様子さん。次はどうすればいいの？」卵を溶き、ダシ汁を入れて茶碗蒸しの種を作り終えた女の子が言った。シェールという名前の彼女は、意志の強そうな口元に、赤い瞳。肩にかかるかかからないかくらいの長さでそろえられた白髪。彼女の赤い瞳は、今は柔和に丸められている。それを見て、ニコリと微笑んだ様子。彼女は、中学生の子供がいるとは思えないほどの美人で、やさしげな風貌から近所からの評判は高い。だが、彼女の息子から言わせるところなる。『あれは食人植物の美しさだな』美しい姿を見せて人を誘い、捕食するという、ファンタジーの怪物に様子の事を例えた。

普段はやさしくて、とても綺麗な女性なのだが、突如として、歴戦の兵でも恐怖に沈むような強力な殺気を放つことがある。その殺気が効かないのは、今茶碗蒸しの具を作っているシェールだけだ。

この光沢を持つ白髪の子は、祥子の殺気をまともに受けても平気な、ただ一人の人間である。チーン、という音が鳴った。祥子が鍋の火を止め、グリルを開けると数個のサツマイモが出てくる。

シェールはそれを見て、いぶかしんだ。「それっておいしいんですか？ 芋を焼くだけなんですよね？」「うふふ……とっても美味しいわよ。もしかしたら、美味しくてびっくりしちゃうかもね」

芋の調理法は、煮るしかないと思っていたシェール。

芋というのは、生のままではとても硬く、水分を含ませて熱を通す事で柔らかくなる食材だ。

焼くことで柔らかくなるなんて事は、シェールの知らないことであつた。

シェールは焼き芋を初めて見るようである。「焼くだけってわけじゃないの。お水で濡らして、お水が飛ばないようにくるんで、蒸し焼きにするのがコツなのよ」一通り、料理の仕方を習っているシェール、別の世界に來ると、学ぶことも多い。彼女は勤勉な性格である。それは。生活をする世界が変わっても衰えることは無い。一つ一つの工程を、珍しそうにしながらシェールは料理を続けた。

泥まみれの金色の瞳

庭にいたラタは、落ち葉を集め、それを袋の中に詰めた。

『燃やすごみ』

そう書かれた袋は、火曜日の朝に捨てに出される。

不要なゴミを国家ぐるみで処分をしているという事実には、ラタは舌を巻く。

ラタはレイグネンではこのようなゴミをどう処分していたのかを考えた。

大きな穴を掘り、その中にゴミを放り込む。その穴が一杯になったら土をかぶせ、他の場所に次の穴を掘る。

この世界にやってきた時に習った、いわゆる『貝塚』の形でゴミの処分をしていたのだ。

自分達は、王になる戦いをしている身だ。王になったらこのような問題も抱えることになるだろう。

この世界のしくみを知る事は、王になったときに国をどう動かせばいいか？ という目安にもなるだろう。

当一や、祥子には、当たり前すぎて、今になって考え直すような問題ではないように感じているだろうが、ラタから見れば、これはすごいことであるように見える。

ゴミの処理は、大問題だ。

ラタは、治安の悪い場所を歩いたことがある。

そこは、生ゴミが腐臭を放っていたり、中には人間の死体が腐っているのが道に放置されているものもあった。

衛生管理の行き届いていない場所だ。そこに住む人間は、ほとんどが病気を抱えている。

顔に痣がある。まるで別の人種のように皮膚が黒ずんでいる。腕にソフトボールのような大きなできものがある。それが当たり前となっているその人達。

ラタにはそれが、自分と同じ、人間の姿だとは思えなかった。
ゴミの処理を考えて、衛生面の整備をすれば、そこにいる人達も
救えるであろう。

この世界にやってきて、発見を繰り返す。そういう経験が、レイ
グネンを良くしていくことにつながるのであろう。

ラタは、几帳面にそう考えていた。

「あらあら……終わったなら言ってくればいいのですよ」

その後ろに祥子の声がかかる。振り返ったラタは、様子に向けて
言った。

「すいません。ぼおっとしてまして」

「それでは、ご褒美のヤキイモを持ってきましたようか。ラタちゃん。
みんなを呼んできてくれませんか？」

ラタは表情を変えず。だが若干顔をむくれさせた。

今日は風がなく、日差しの強い日だ。二時の時間帯になると、冬
のこの時期になっても日差しが暖くなる。

今は、四人がそろって家の縁側に座っていた。

「ヤキイモに釣られて、ホイホイ庭掃除なんてね」
シェールは言う。

「あんた、まるで餌付けされた犬みたいね」

ラタは、いつもの半眼でシェールの事を見る。心なしか、その目
には恨みのようなものがこもっているように見える。

「がおー」

「わかったわよ。あんたは犬じゃなくて怪獣なのよね」

シェールは、ラタの事を身視して、ヤキイモをほおびり始める。

「まったく、相手がリーシアならば、『あなたはパンダのリンリン
でしょうに』などと言って言い返せたのですが」

その横でヤキイモを食べていたリーシアが二人の間に入ってくる。

「誰がリンリンだぁ！」

「ラタ様……それは禁句ですわ……」

「ノエリアのドジッ娘メイドと同じくらいの禁句ですか」

「ラタ様！　いくらラタ様でもそれは許しませんわ！」

ノエリアとリーシアにそう言われても、ラタはツンとしてもそもそとヤキイモをかじった。

そこに、みんなが並んでいる後ろでお茶を飲んでいた当一が口を挟む。

「ラタは機嫌が悪いんだよ。『庭掃除をしたのは自分なのに、なんでみんなでヤキイモを食べているんだ？』って」

「働かざる者食うべからずです。当一はそれをよく分かっているようです。評価しますよ」

他の三人はそれで黙ってヤキイモを齧り始めた。

こういう言葉が出たからには、黙ったほうがいい。下手に話を続けると、結論は一つになるに決まっている。

「ラタちゃんはいいい事を言いましたね。他の子達にも、後で何かお手伝いをしてもらいましょう」

三人がわざわざ黙っていたのに、それを許さずに一気に結論を言ってしまった様子の一声であった。それに三人はそろって顔をゆがめた。

「それに、当一はラタちゃんの事を気遣って欲しがらなかったのよね。えらいわ」

「みんなに食われて俺のぶんがなくなっただよ」

「あらあら、うふふ……強がっちゃって。かわいいわね」

そう言い、様子は当一の後ろに回って当一の体に腕を回した。手で当一の頬をさする動作を繰り返す。他の四人はそれを横目で見ていた。ピリピリと刺すような視線であるが、当一と様子には届いていなかった。

すぐに様子は当一から離れる。

「それでは、私はお洗濯に戻りますね」

そう言い、去っていく間際、様子は小さな声で言った。

「本当に、みんなかわいいわね」

当一には意味が分からなかった、嬉しそうな横顔をちらりと見て、悪いことではないようだ、と、考えるのが精一杯の事である。

当一は、乾いた砂を踏みしめた。

地面を蹴ると、足の裏に小石の混じった砂の感覚が残り、砂埃が軽く巻き上げられる。

当一が通学に使っている革靴でそこを歩くと、すぐに砂が靴の中に入り込む。どうせなら、山歩き用のウォーキングシューズを履いてくればよかった。

前回のような舗装のされた街道を歩くことになると思っていたため、用意をしてこなかったのだ。

「前はヨーロッパ平野かと思ったら、今回はアメリカのグランドキャニオンかよ……」

赤茶けた色の断崖絶壁が両側に広がる。見渡す限り、同じ色をした岩の壁が広がり、階段のように段々になった山が、いくつも見える。

ここはグランドキャニオンのような風景に見える。だが、ここはレイグネンという異世界である。あくまでも、グランドキャニオンに似た場所だ。

右側には壁。左側には崖。人が、横に並んで数人歩くことができ、ほどのスペースが道になっており、シェール、リーシア、ラタ、ノエリアを合わせた五人で歩いている。

歩く順番は、ラタを先頭にし、その後ろにシェールとリーシアが歩き、その後ろにノエリアと当一が歩く。

ラタが前衛、リーシアとシェールが中衛、ノエリアが後衛をしながら当一の護衛をするという形だ。

鉄板をつなぎ合わせて作ったような鎧を着て、髪を鎧の上に垂らしているラタは風が吹いて砂埃が巻き上げられるたびに顔を曇らせた。

「帰ったら鎧の手入れをしなければなりませんね」

この、重厚な鎧の継ぎ目に、砂が入り込んでしまえば、動きが硬くなってしまう。固まってしまう前に、洗い流しておかなければならない。

「ぼやかないの。好き好んで着ているのでしょう？」

髪を手で弄りながら、リーシアは言う。

「帰ったら髪を洗いたいわ。埃っぽいし、ボサボサになっちゃう」
刺繍の書かれたローブを着たリーシアは、耳から垂れ下がった髪を自分の目前にまで持ってきて、鋭い目をつまらなそうに細めて言う。

「それなら私もですね。髪だけは我慢できるように、いつも手入れをしているのです」

そこに、シェールが口をはさむ。

「あなた達、いつ敵に襲われるか分からないのに、ずいぶんと余裕ね」

リーシアとラタとは違った形で、目を細めているシェール。

油断なく、辺りを警戒しながら窺っている。

「気にしすぎよ。こんな危険な場所で敵が襲ってくるわけが無いでしょう」

リーシアの言うとおり、確かにここは一本道の場所である。前と後ろにしか道はなく、意表をつく方法なんて、ガケを飛び降りてくるか、ガケを這い上がってくるかしかない。

「ガケを駆け下りて、敵に攻撃をしかけた武将の話なら、昔あったぞ」

当一が言う。当一は、かなりの歴史マニアだ。その知識を熱く語ったりする事はないから、ただの『博識』で通っている。

今言ったのは一ノ谷の逆落としの話だ。あれは馬ごと崖を駆け下りている。

馬にも乗っていない人間であれば、滑り降りてくることだってありえるだろう。

その五人の様子を、崖の上から見下ろす姿があった。

九人という人数である。手製と分かる、獣皮で作った胸当てや、くたびれた服を着た面々ばかりで、ラタのような見事な鎧や、リースアのような刺繍の施された高価なローブなどは着ていない。

その中で、一番目を引くのは長身の女であろう。

肩に無骨な肩掛けをかけ、そこから伸びる紐が二メートル以上の長さがある戦斧を抱えていた。髪をざんばらに切り、後ろの髪を束ねている姿。金色の瞳が鋭くなり、崖の下道を歩く獲物の五人組を睨んだ。

「毛並みのいい奴らが揃っているじゃないか。獲物に選ぶのには十分だ」

金髪金瞳のエイディエルは斧を持ち、一回、斧を横に振り切った。視界に遠く存在する五人の姿を斧の刃で両断する。

重厚な刃を持った斧は、空を切り、ブウンっ……という音をたてて空を切る。

肩に斧をかつぎ直し、後ろにいる自分の仲間達の姿を振り返って確認したエイディエル。

「準備はいいな？」

それに答えたのは、全身をマントに包んだ少女だ。右のほほに痣があり、ほほから耳にかけて紫色に染まった顔をしている。

腿にバンドをして、そのバンドにいくつものナイフをくくりつけているのが、風でたなびいたマントの隙間から垣間見えた。両手に一本ずつのナイフを持ち、薄桃色の髪を頭の上で結い上げている。

答えはこういうものだった。

「問題ない」

他の者達は、それに対してそれぞれコクリと頷いた。

「それじゃあ行くぞ」

エイディエルは、先陣を切って崖を滑り降りていった。

泥まみれの金色の瞳 2

「敵襲よ！」

周りに目を見張っていたシェールは、崖の上から滑り落ちてくる集団を赤い瞳で捉えた。

シェールは、鞘から剣を抜き、滑り降りてくる集団に向けて剣の切っ先を向けた。

次に反応をしたのがリーシアだ。

アースウォール

滑り降りてくる集団の中に、頭から突っ込んでくるように降りてくる者がいる。それを狙って、進行方向に土囊のような岩の突起を作った。

リーシアの狙い通り、顔から岩の突起にぶつかっていき、両手両足を投げ出す無様な格好でぶつかっていった。

リーシアは次々にアースウォールを作り出し、同じようにぶつけていった。

「撃墜数三……もらったわ」

「いきなり大戦果ですね」

リーシアが言い、ラタが答える。

「無駄口をたたくな！」

のんきな会話をしている二人に対して、シェールの激が飛ぶ。

シェールが剣をかまえる前に立つラタ。

「将が最前に立つのは危険です」

滑り降りてくる者達の中の一人に切っ先を向けたラタ。シェールを背中を押しながら、狭い通路の幅をいっぱいに使って距離を作った。

「何をするのよ！」

シェールがラタに言うが、ラタはじつと前を見ながら、背中のシェールに向けて言う。

「前に出すぎです」

ザザザ……

砂を擦るような音が聞こえ始め、それがどんどん大きくなってくる。それ一緒に、相手の姿も、鮮明に見えるようになってくる。

シェール達とエイディエル達の視線が交わりあい、開戦の瞬間が目前に迫ってくるのを、シェール達は肌で感じていた。

相手の動きに合わせて、ラタは前に向けて走った。

大きな戦斧を持つ敵に向けて突進をした。相手の足が地に着く直前を狙う。未だに崖を滑り降りており、足元がおぼついていない瞬間を狙って、剣を下から切り上げた。

敵は不安定な姿勢ながらも、斧を上から振り下ろす。ラタの剣とエイディエルの斧がぶつかり合い、ラタの剣はたたき飛ばされた。

ラタはエイディエルの隣を駆けぬける。

ラタに続いたシェールが、斧を振り切り姿勢を崩したエイディエルの脳天に、剣を叩き落した。

エイディエルの後ろから薄桃色の髪をした小さな影が、シェールに向けて飛び掛った。

それに押されて剣の動きを止めたシェール。フェイスメイルに阻まれて、その影がシェールにとびかかる前にはばまれる。

「シェール！ 下がちなさい！」

リーシアが言う。

シェールのフェイスメイルを蹴って、地に足を付けた小さな影に、ファイヤーボルトが打ち込まれる。

数個の炎の矢が影に向けて飛んでいく。

ダン！ ダン！ ダン！

ファイヤーボルトでできた土埃が晴れると、小さな影が着ていたマントで全身をくるんだ姿が出てきた。対魔法用の加工をしてあるマントがリーシアの魔法を防いだようだ。

何もなかったように立ち上がり、ラタやシェールとは違う、二刀のかまえを見せて、瞳をシェール達に向けた。

二本のナイフを胸の前で交差させるかまえ。服装は、全身をダブダブの外套で包み、そこかしこに暗器を仕込んでいる。

「アサシンとは、初めて戦います」

その姿を見たラタが言う。

「アイシャだ」

アサシンは自分の名前を言う。目を大きく広げ、目に映る情報を一つだって逃さないようにしているようだ。

それには鋭い目とは違った威圧感があつた。

エイディエルとアイシャ。その二人に続き、次々と後続が降りてきた。

「ラタ！ 時間を稼いで！ シェール！ こっちにきなさい！」

リーシアが言って、シェールを自分のところに引き寄せた。

リーシアはシェールの前にかがみこむと、シェールのおなかに手を伸ばした。

「動くな！」

リーシアの事を見て身を引いたシェールだったが、リーシアが言っておなかに刺さっていた毒針を抜いた。

「いつの間に？」

シェールが言う。

「さっきで刺されたのよ」

リーシアは、アイシャとシェールがぶつかり会った時に、アイシャがシェールの腹に何かをするのを見ていたのだ。

毒針を回収し、持っていた脱脂綿を取り出してそれをシェールのおなかにあてる。

「消毒液よ。どれだけの効果があるか、分からないけど」

キュアポイズン

シェールの体に、すつ……と冷たいものが染み渡るような感覚が生まれる。

ノエリアが様子を見て魔法をかけたのだ。毒を浄化する魔法である。これで毒はシェールの体から消えたはずだ。

ラタは五人の敵を相手に応戦をしている。こちらから打って出るような事はせず、防戦一方の状態だ。

リーシアは魔法の詠唱に入り、シェールはその戦いの中に飛び込んでいった。

ラタと、剣での押し合いをしていた一人に、シェールは横合いから突きを放った。シェールの攻撃に気付き、距離をとった相手。そこを、リーシアのファイヤーボルトが襲う。

ドオン！ ドオン！ ドオン！

「直撃……」

リーシアは言う。命中した時の音が違うのでそれが分かった。

相手は、アイシャの着ていたような、対魔法のマントは着ていなかったようだ。土埃が晴れる頃には地に伏せた姿をさらしていた。

「これで撃墜四……」

これで、四対四の形になった。シェール達は、エイディエルとアイシャ達とにらみ合う。

「どうだ？ 空いた時間で自己紹介をしないか？」

エイディエルは斧を構えたまま言った。

「私はエイディエルだ。私達九人は、師もなく独学で確固の技術を手に入れている」

貴族出のシェール達と戦えるのは、自分の力を確認できるいい機

会だ。全力で戦うのでそのつもりでいてくれ。エイディエルが言ったのは要約するとそういう言葉だった。

スポーツマンの開会宣言のような内容だ。数分にわたってその声を聞くシェール達。

「どこから用意をしてきたような言いようですね」

ラタが返事をする。

「いいじゃないか。『名乗り』をする。ってのを一度はやってみたかったんだ」

「それだけじゃない気がしますが……」

そう言い、ラタは剣を構えて腰を深く落とす。

「時間稼ぎね？」

リーシアがガケの上を見上げて言った。

チェリンは吹き抜ける青空の下、大きな岩に魔法をかけるという骨の折れる仕事をしている。

秋の空の下に、風が吹き抜ける。涼しい風を浴びているはずであるのだが、彼女はあごからポタポタと汗のしずくを流した。

これはそれほどの大仕事だ。

親からもらったフードは、魔法がかけられており、銀の刺繍の入ったもので、実際に対魔の性能もある。

それ以外の服は他のエイディエル組の面々のようなボロボロの服ではないものの安価に作られた、無地のものである。

エイディエル組の中でも、唯一由緒のある家系の出身者だ。没落した魔術師の父を持ち、この王を巡る戦いに参加をする事のできる年に生まれたことから、両親からの期待は大きかった。

だが、彼女は魔法の覚えが悪い。

生来の気弱な性格もあり、戦いには向かず、エイディエル組の中でも足を引っ張っている。

今、彼女が大岩にかけている魔法は、スパローロックという。石ころに魔法をかけ、自由に動かす事のできる魔法だ。普段は、

小さな石を飛ばすのに使われている。

大岩を動かすのは応用的な使い方だ。

シェール達の位置からすると、ガケの上に立つという位置関係である。ここから転がして、シェール達にぶつけようというのである。岩を移動させて、自分もガケの淵に立ち、眼下に見えるシェール達の事を見下ろした。

獲物達の中に、魔術師がいる。紫色の髪をしており、自分よりも豪華な魔法のローブを着たその魔術師は、こちらの事を見つけて、下から睨みあげた。

その鋭い眼光に、チェリンは身震いを覚えたのだ。

ガケの上から大岩が転がされた。

エイディエルは、ニヤリと笑ってシェール達に武器を向けた。あの大岩はチェリンの意思で動かす事ができる。チェリンは上手くシェール達に当てられるだろう。

自分達は、シェール達が上手く動けないようににらみをきかせる仕事がある。

そう思っているところにリーシアが動いた、

デイスペル

大岩にかけられた、スパローロックは、解除をされ、チェリンの操作からはなれてまっすぐ落ちていった。これでは、シェール達を襲う事はできない。

「応用は、基本ができてからよ」

リーシアは、足元にある小石にスパローロックをかけ、飛ばしていった。

それは、まっすぐにチェリンに向かっていった。

一つ目の石は、チェリンの額に当たった。チェリンは、額を叩きあげられて体が弓なりにのけぞった。そこに、二つ目の石がチェリ

ンの腹に命中した。のけぞったところにおもいつきり腹に打ち込まれ、体をくの字に曲げて悶絶をする。

最後にチェリンの顔面に石が飛び込んだ。突き出された顔に、また石が打ち込まれ、ついにはチェリンは膝が崩れて、前のめりに倒れていった。

泥まみれの金色の瞳 3

「撃墜五……」

リーシアは、自分の戦果を誇って言った。ゆっくりとエイディエル達に視線を向ける。

「あれはひどすぎますわ……」

容赦のないリーシアの攻撃を見て、後衛をしていたノエリアがうめく。

そのシェール達の前を、轟音をたてながら大岩が横切っていった。ゴロゴロと転がりながら、大岩はガケの下まで落ちていく。

ガケの底にたどりついた大岩は、腹の底に響く、ドスンという鈍い音をたてた。本来ならば、シェール達を押しつぶすはずであった大岩は、役目を果たすことなくむなしく落ちていったのだ。

その音の余韻が消えるまで、シェール達とエイディエル達はずっとにらみ合った。

シェール達は当然余裕のある表情をしている。相手の策は破れた。そして、実力は自分達のほうが上だ。

シェール達からしたら、これは勝てる勝負であるのは明白である。

「シェール。合図をして」

リーシアが杖を使って印を切りながら言う。丸を描いて動かした杖の軌道は光の線になり、光の輪の中に火の玉が生まれる。

リーシアが言うのは、エイディエル達にトドメを刺すための合図だ。

シェールは剣を真上に掲げた。

「攻撃……」

そして、シェールから『開始!』と号令がかけられると、全員の一斉攻撃でエイディエル達に強襲をしかける。

そのための用意をしているところに、魔法が唱えられた。

突如としてシェール達のいる場所に竜巻が吹いた。リーシアは、

その風に飛ばされて、ガケの下に落ちていった。

シエールが見上げると、ガケの上から滑り降りてくる人影があった。額に擦り傷を作り、鼻から血をたらしながらも、チェリンがやってきたのだ。

シエールは、チェリンが滑り降りてくるのに合わせて、崖下に立ってチェリンを迎え撃った。

ラタは、剣を下段にかまえた状態でエイディエル達にまで走っていった。エイディエルの数歩手前で足を止め、剣を横薙ぎに振り始めた。

だが、どう考えてもエイディエルまでは届かない距離だ。この距離ではエイディエルにかすりもしない。

そこで、ノエリアが魔法を唱える。

ラタの剣の先から光の刃が伸びていく、バルムンクという魔法だ。伸びた剣の刀身は、崖の壁をレーザー光線で焼いたように焦がしていく。

光の刃が、エイディエル達を両断するために横薙ぎに切りはらわれていく。

エイディエル達は、それをしゃがんでかわした。アイシャは、ラタの攻撃をもっともせずに光の刃を飛び越えてラタに飛びかかった。ラタは剣から手を離し、無理矢理な姿勢で右腕の裏拳を薄桃色の髪をしたアイシャにたたきつけた。

アイシャはわき腹に攻撃を受けるも、ラタの腕をつかむ。さらに、ラタの腕を両腕でかかえる。

『このままでは折られます！』

そう思い、ラタは腕を思いっきり地面にたたきつけた。それで、アイシャを無理矢理引き剥がしたラタは、剣をかまえなおす。

眼前には、斧を振り上げ、今にも振り下ろそうとしているエイディエルの姿があった。

シエールは、チェリンが滑り降りてくるのに合わせて剣を下から振り上げた。

チェリンが魔法を唱えると、姿が消える。ノエリアの前にチェリンの姿が現れた。

ファイヤーボルト

チェリンが魔法を唱えると、火の玉がノエリアを襲った。

ダン！ ダン！ ドオン！

三発放たれた火の玉。一発目で、ノエリアのフェイスメールに亀裂を作った。二発目は亀裂が網目のように走り、今にも割れそうな姿になる。三発目は、フェイスメールを突き破り、ノエリアに命中した。

ノエリアは火の玉に襲われた衝撃が抜けるまで待つ。息を大きく一つ吐くと、フェイスメールをまたかけなおした。

チェリンは、またファイヤーボルトの詠唱を始める。

「そう何度も！」

目の前で何度も魔法の詠唱などを成功させるわけにはいかない。自分の目と鼻の先で、魔法の詠唱をしているチェリン。シエールはチェリンの背中を切りつけた。

詠唱の最中であつたチェリン。背中を剣で切りつけられ、鋭い痛みが走る。一度は詠唱を止めてしまいそうになるが、チェリンは齒を食いしばって詠唱を続けた。

ダン！ ドオン！ ドオン！

次のファイヤーボルトでは、一発目でフェイスメールに網目のような亀裂ができた。

二発目は完全に貫通し、ノエリアの事を襲った。三発目は、すでに気力のみで立っており、うつろな目をしているノエリアにトドメを刺した。

三発目のファイヤーボルトで、吹き飛ばされたノエリアは、崖に背中から叩きつけられて、意識を失った。

ラタはエイディエルの戦斧が振り下ろされるのに反応して、ガードをするために剣を掲げた。

エイディエルの戦斧は、ラタのフェイスメイルを突き破り、ラタの剣に、おもいきり叩きつけられた。

ラタは全身にしびれるような感覚を感じる。全身の関節と筋肉に負担がかかり、軋んでいる。

そこに、アイシャの毒針がラタの鎧の継ぎ目から差し入れられた。ラタの懷にもぐりこんだアイシャは、ラタの顔面に向けてナイフを突き出した。ラタはそれを首を振ってよける。

続いて、ギラリと光る鋭い刃を持ったエイディエルの戦斧が、ラタに向けて振り上げられた。

みんなから下がった場所にいて戦いを静観していた当一。ノエリアが倒れ、赤茶けた壁に背を預けている。ラタだって、危ない状態だ。シエールが助けにいらしているが、間に合いそうにない。

赤茶けた砂を巻き上げる風が、少しだけ彼女らの姿を不鮮明にして当一の目に映す。

当一はセイフテリングを光らせた。一瞬の間に当一の体は巨大化する。

当一は、シエールと契約をした。シエールの王の座をかけた戦いのジェズルとして。

そのジェズルには、エスカッションという怪物に姿を変える能力があった。当一は、今からそのエスカッションに変化をする。

清涼な青みをたたえた体。トカゲのようにはらばいになる姿。背

中にはいくつもの鋭い剣のような突起がヤマアラシのようにびっしりと生えていた。

その昔に勇者によって退治をされたという、ドラゴンオブソードマウンテンという巨竜の姿であった。

ドラゴンオブソードマウンテンは、すぐにラタのところまで走りよっていった。

日本刀のような爪が生えた前足でラタをつかみ、腹でかかえながら、丸まった姿勢で崖から飛び降りていった。

シェールは当一の意図を察し、ノエリアの事を担ぎ上げてガケを滑り降りていった。

「追う」

アイシャはそれを追おうとするが、それをエイディエルが止める。「追っていったら勝ち目はないぞ」

奇襲をかけるために、自分のジェズルは遠い場所に隠したままだ。それに、ガケの下にはリーシアがいる。

チェリンの暴風の魔法で吹き飛ばされた彼女は、仲間を四人も倒した敵の注意人物だ。

「相手の戦力が分かっただけよしとしようじゃないか」

エイディエルは、ドラゴンオブソードマウンテンの姿をその目で見た。

この戦いは、候補者同士の殴りあいよりも、エスカッションのぶつかり合いの方がはるかに重要度が高い。

エイディエルは、自分の持っているエスカッションが有利に戦える場所を考えて、その場所を選ぶ権利を得たのである。

ガケの下には水が流れている。水の量は、そんなに多くない。小川が這うように走っており、それが所どころ合流したり枝分かれしたりを繰り返している。

シェールはしりもちをつくようにして腰を下ろすと、ピチャン！

という音がした。

ラタを地面の上に降ろすと、ドラゴンオブソードマウンテンのまの姿の当一は、シェール達にあわせるために、顎を地面の上に降ろした。

「ノエリアは無事か？」

どこから声を出しているかは分からないが、口を動かさなくても、当一の声が聞こえてきた。

「ただの打ち身よ。まあ、詳しいことはあの役立たずに見てもらわ」

シェールが空を見上げると、大ワシにつかまってここまで降りてようとしているリーシアの姿がある。

「ごめんなさいね。どうにかして上に上がろうとはしていたんだけど」

ワシから手を離して飛び降りてきたリーシア。一度、シェール達の様子を見回した。

「ノエリアは大丈夫なの？」

「しこたまファイヤーボルトをもらってたわ」

リーシアは、ノエリアに駆け寄ると、頬を持って顔中を観察する。

「問題は無いみたい。シェール次はあなたよ」

「私はなんともないわよ」

「毒針で刺されたところよ。ひどくなるかもしれないわ」

リーシアは、シェールの服を捲り上げると、患部を観察する。

「当一。目をつぶってください」

様子を見ていた当一だが、ラタが当一の前に立って両腕を広げた。ドラゴンオブソードマウンテンの目が、それで閉じられる。

それでもずっとその場所に仁王立ちを続けるラタは、シェールとリーシアの事を見た。

「少し腫れているわ」

リーシアはタオルをシェールに巻いた。

「これでいいわ。すぐに帰って毒の種類を調べておくわね」

献身的なりーシアの応急処置であつた。普段はクールな彼女の意外な一面がこれで見れたのかもしれない。

幕間

ラタは、よくスラム街を通っていた。

ヘンクツであるが、腕がいい事で有名な鍛冶屋が、スラム街のど真ん中に居をかまえていたのだ。

昔から重厚な鎧を着て戦いに参加をするつもりだったラタ。その頃は十歳であったが、危険な場所であるにもかかわらず、何度も足を運んで寸法などを測っていた。

今は十四歳であるが。今になって着ている鎧は、その鍛冶屋に頼んで作ってもらったものだ。

スラム街は、危険極まりない場所であるが、目的の場所に着くまで、馬車から一步も出ず、寄り道もせずに鍛冶屋のところに行く事を、両親と約束をしてそこにかよっていたのだ。

ラタが、いつも通る道の同じ場所に一人の女の子が座っていた。

金色の髪をしており、表情の見えない彼女の金色の瞳は、常に自分の事を見上げていた。

ラタには、彼女が何を思っているのか分からなかった。自分の事を見ているのか？ それとも、馬車を眺めているのか？ もしかしたら自分と友達になりたいのかもしれない。

その頃のラタは、何人もの家庭教師から、かわるがわるに教育を受けていた。

同年代の友人と遊ぶ時間よりも、勉強や訓練をしている時間の方が長かったのだ。

同年代であろうと思われる、スラム街の彼女に、憧れを抱いていたのが、その頃のラタだった。

ある日、意を決したラタは、その子に靴をプレゼントしようとした。

だが、一緒になっていつもその鍛冶屋のところへと行っている使用人がそれを止めた。

今、馬車の中で、お互いに向かい合わせになって座っている。

昼間であるのだが、窓にはカーテンをかけられているうえ、外は家がびっしりと建てられている広くない道だ。

周りの建物に阻まれて、外の光がとどいてこなかった。ランタンで光を灯しているが、それでも部屋の中は薄暗い。

「下賤の者などに、そんなものを渡してはなりません。近づく事自体がならないことです」

使用人の男はラタに向けて言った。

「傲慢です」

使用人の男の傲慢の物言いにラタが言った。

人は皆平等のはずだ。スラム街に生きているからといって美醜などはないはずである。ラタが言う、それに対して使用人は言い出した。

「ならばわたくしめが渡してきましょう」

そう言うのと、使用人はラタがラッピングをした包みを持って、ドアを開けて出ていった。

ドアが開くと、外の明るい光が一瞬こぼれてきた。この、馬車の中よりも、外の方が何倍も明るいのだ。

いくら安全のためとはいえ、このようなくらい場所におびえるようにして籠っている自分がどうして美しいのだろうか？

今の自分は、勉強漬けの毎日を送っている。

野山をかけまわって日の光を浴びて遊ぶ事ができない窮屈な生活をしている。今だって、治安が悪い場所だからといって、震えて太陽の光から逃れる、箱の中に入っている。

こんなモグラのような者が、太陽の光を浴びている少女よりも立派なものであるわけがない。

その時はそう思っていた。

使用人は背筋を伸ばして、礼儀正しくその女の子に礼をした。

「初めまして、私はヴェンター家の使用人をしている者です」

礼儀正しい挨拶をする。それに対して、何も答えは返ってこなかった。

座り込むその女の子は、金色の瞳を不思議そうにして、使用人の事を見上げていた。

「お嬢様からのプレゼントです。お受け取りください」

使用人は、貴族を相手するようにして、礼儀正しい態度で接していた。だが、その女の子は金色の髪を揺らして立ち上がった。そして、隠していたさびついてボロボロになったナイフを使って使用人に襲い掛かっていったのだ。

女の子はナイフを振った。

持っていた箱は乱暴に奪い取られ、さび付いたナイフで切りつけられた使用人は右目を切り裂かれた。

それを、馬車の中で見ていたラタは、馬車のドアを開け放った。

剣を持ってその女の子をきりつけようとしてハイヒールを履いたまま、ガタガタの石畳を踏みしめて彼女に向かっていった。

「ラタ様！ なりません！」

使用人の男の声で、ラタは足を止めた。

「なぜですか！ 私のせいであなただは目を……」

すでに、あの女の子は逃げ出して建物の影まで隠れていつてしまっている。

「分かっていただけましたか？」

使用人は言う。

人は皆平等で美醜も上下もない。そんなものは建前だ。

生まれた場所、育ち方、得た経験などは、皆が違う。

この汚れた街に住む人間は腐ってしまうのだ。本当は、人には美醜があり、生きる世界の違いもある。

「分かりました……」

ラタは使用人の説明を聞き、頷いた。

「分かっていただけのならばよろしいことです。それは、私の片目以上に価値があります」

使用人はそう言う。

馬車に乗り込んだラタたちは、馬車の足の向け先を医者の方所へと向けていった。

姉妹の力

リーシアは当一の家の戻るとすぐに研究室に上がっていった。

二人に風呂場で、患部を水で洗い流すように指示を出していた。シェールとラタは、二人で風呂場に向かっていく。

今、絨毯の上にバスタオルを敷き、その上に寝かされているノエリアの横に当一がいた。

今、当一はリーシアに言われたとおりに氷水の入った袋をノエリアの患部に当てるように指示を出されてそのようにしていたところだ。

「患部っていつてもな……」

ノエリアがどこを打たれたのかはさっぱり分からない。服をめくったり、体を触って調べたりしながら、どこに当てればいいかを確認していく。

そこに、ノエリアのまぶたが動いた。

「目を覚ましたか？」

ノエリアは目をパチクリとさせ、顔を覗き込んだ当一の目を見つめた。

それから、自分の体を見る。当一の手が自分の服の裾をまくりあげていたり、わき腹に触れていたりしている。

それから一気にノエリアの顔が赤くなっていた。

泣きそうなくらいに顔を歪め、絞るように声を吐き出した。

「ひっ……いやあああああああああああ！」

最初は絞るような声だったのだが、それはすぐに悲鳴に変わっていき、そこで初めて当一は、身の危険を感じたのだ。

リーシアは、針を調べ、毒の種類を鑑定しているところだ。針から抽出した毒は、精製のされた純粋なものではない。それが分かったところだった。

「厄介ね……」

毒針を指でつまみ、目と鼻の先に持ってきて針の事を凝視しているところに、ノエリアの悲鳴を聞いた。

『ひっ……いやあああああああああ!』

屋根裏部屋にいるリーシアですら、その大きさに驚くような大声を聞き、リーシアは驚いてドアの方に向けよっていった。

「何があつたの……?」

ドアを開けると、階段の下に当一がいるのを見つけた。

「今の声は聞いたか? ノエリアは目を覚ました。おれは手を離せなくなつたんでノエリアに自分でやらせるように言っておいてくれ」
「ああ……なるほど……」

今までの事を聞いて、状況を察したリーシアは言う。

「私も片付けをしたらそっちに行くわ。様子さんも説明をすれば分かってくれるはずよ」

「助かる」

当一はほっとしてそう言う。だがその直後に恐怖で顔面を引きつらせた。

「当一さん……どこに逃げようというのですか……」

当一の母親の様子の声であった。

「女の子の寝込みを襲って体を触っていたとか……本当に節操の無い子ですね……」

祥子は、当一の事をセクハラの犯人であると思っているのだろう。

「死なないでね」

「分かってるさ」

まるで、当一を死地に送る前のような言いようで言う。首根っこを細くて長い指の手につかまれた当一は、引っ張られてリーシアの視界から消えていった。

「すみませんでしたわ」

様子にお小言を言われているところに、リーシアがやってくると、

すぐに事情を説明した。体の数箇所に入った袋をタオルを巻いて固定させた姿で、ノエリアはふかぶかと頭を下げた。頬に巻かれたタオルが痛々しいノエリア。

リーシアは立ち上がって言った。

「それじゃあ、あなたは安静にしていなさい。シェールとラタの方は私が面倒を見ておくから」

「ラタ様が！ いったいどうなされたのですか？」

「毒針にやられたわ。処置はこれからよ」

「手伝いますわ。ラタ様の処置は、私にやらせてください」

立ち上がりとしたノエリアだが、リーシアは優しく肩を押さえてまた座らせる。

「あなたは安静にしていなさい。まだ体が痛むんじゃないの？」

そう言って、リーシアは風呂場まで歩いていった。

シェールとラタは、リーシアに言われたとおりにシャワーで刺されたところを洗っていた。

腕や足なら、水道で流せばいいのだが、二人とも腹や脇腹を刺されている。

『どうせなら、ついでお風呂にも入ってしまいなさい』という、リーシアの言で、二人はシャワーを浴びていたのだ。並んで、シャワーを頭からかぶる二人。

「どこを刺されたのかよく分からないのですよ」

わき腹を刺されているラタは、鏡を使っ自分の姿を見ているが、どこを指されているのか良く分かっていない。シェールのように腫れているわけでもなく、毒針を抜いてしまった後になっては痛みが残っているわけでもない。

毒の進行には個人差がある。

シェールは、ラタの前にかがみこんだ。

「よく見せてみなさい」

ラタの体に手を這わせて、わき腹に傷がないかを確認していた。

「くすぐったいです。触らないでください!」

「ちよっとおとなしくしていなさい」

シェールは、ラタの様子を気にせずに、傷の確認をする。

『よく見よう……』と考えて、ラタの体を持って、わき腹を自分の顔に近づける。

「ひいっ!」

ラタの体がピクンとはねるが、真剣になっているシェールは、まったく気にしていなかった。

「ああ……もう」

ラタが動くので、シェールは『いつそのこと』と思い、ラタに腕を巻きつけた。

シェールはラタが動くので固定をただけのつもりのものであった。

「ち……ちよっと、シェール!」

「これじゃないの?」

怪しい傷を見つけたシェールは、ラタの傷を指でつつこうとした。そこに、バスタオルを持ったリーシアが風呂場の扉を開けて入ってきた。

「あ……」

ラタがうめいて言う。

リーシアは、バスタオルを持ったまま動かなかった。二人の様子を、眉一つ動かさずに見つめている。

「いや……これはですね」

ラタが言う。

「何かいいなさいよ……」

シェールが言うが、リーシアはまったく動かなかった。

しばらく、きまづい空気が流れた。それを破ったのは、リーシアがあせったように早口で言った言葉だ。

「タオルはここに置いておくわ」

リーシアは表情を変えずにきびすを返し、そそくさと風呂場から

立ち去っていったのだ。

「ちょっと待ちなさい！」

「ちょっと待ったあ！」

シェールとラタは一緒になって風呂場から出て、リーシアの事を追っていった。だが、二人の前に祥子が立ちほだかる。

「びしょ濡れのまま外に出てはいけませんよ」

それで、二人の背筋に悪寒が走った。二人は恐怖に従って、ぎくしゃくした動きで風呂場に戻っていった。

「まあ、後でね……」

シェールは沈んだ様子で言った。

「何と言うかは考えておきましょう」

ラタも、表情こそ変えないが、沈んだ声で言った。

二人は揃って髪をシャンプーで洗い、シャワーのお湯を分け合って洗い流しているところに、また風呂場のドアが開けられた。

ラタとシェールが同時に振り返ったところに、パシャリと写真の撮られる音が聞こえる。

そこには、何食わぬ顔でカメラをかまえているノエリアがいた。

「何のつもりですか……？」

ラタはついに顔を歪めた。ラタがこんな表情をしているのは、シェールが見るのは初めてだ。ラタが青ざめた顔で驚いた表情をしながらノエリアに聞いた。

ノエリアは顔をキリリとさせる。

「お二人の思い出をおさめる係りを勤めさせていただきますわ」

シェールとラタの二人には、まったく意味が分からなかった。

「この思い出は、いますぐにでも脳ごと焼き切りたいです……」

ラタは言うが、ノエリアは首を横に振る。

そのしぐさには、一体どのような意味があるのだろうか？ 理解がおいついていないシェールは、固まったままその顛末を見届けていた。

「確かに見つかってしまったのは残念です。ですが、これからが一步ではないですか。いつまでも隠れて行為に及んでいるようでは、二人の幸せは、闇の中に沈んだ寒さに、耐えながらのものから脱却しません」

『行為』 って何？ 『二人の幸せ』 って何？ 何が『闇に沈んでいる』というの？

ポタポタ……と鼻から血を流しながら言うノエリアは、目を血走らせていた。

「それはあなたの願望でしょう！ 私は何もやましい事などありません！」

そしてまた、さっきしたようにしてノエリアは首を横に振った。それから、ラタが何と言って弁明をしても、ノエリアはその事を理解しなかった。

姉妹の力

それからラタとノエリアの口論は決着しないまま終わった。

シェールは、風呂から上がると、廊下でリーシアとばったり会った。

リーシアは、すっ……と目をそらすと、シェールの顔を見ないまま、自分が調査をした薬を渡した。

「私達はただの友達だから……」

リーシアは目をそらしながら言った。

「待ちなさい！ 誤解してるわよ！」

すすっ……と早足でシェールから離れていく。シェールは慌てて、リーシアの手を掴んだ。

「きゃあああ！」

リーシアは、何か恐ろしいものから逃げようにして、思いっきりシェールの手を振り払った。

「待ちなさい！ 何なのそのリアルな反応は！」

シェールが言う事には答えず、肩で息をしながら目尻に涙をためているリーシア。

「ごめんなさい。驚かせるつもりはなかったの」

これもまたリアルな反応をしてリーシアが答える。シェールに気を使いつつ、だがシェールを避けるようにしている態度を見せる。

そういう態度をとられると、嫌悪感をあらわにされるよりも、心が痛い……

「あの……えっと……」

涙目のシェールは何を声をかけていいのかわからず、もやもやした気持ちのままリーシアの事を見送っていった。

シェールはあれからふさぎこんでいる。

「きゃあああ……って何よ」

シェールの口からそう言葉が漏れる。

リビングでソファァーに座りこみながら、ぶつぶつと言っていた。

当一はその様子を見て思う。

『重症だ……』

今、ラタがノエリアを押さえつけて事情を説明しようとしている。ラタがうまくやれば誤解を解いてくれるだろう。

当一はとりあえずは何かを話しかけようと思い、シェールに聞いた。

「ラタと一緒にうちにやってきた、メイディーって子はどうなったんだ？　なんだか顔を見ないんだが」

「あの子の事はリーシアに任せてあるわ。あれで世話好きな所があるから」

シェールが言う。リーシアが世話好きというのは意外な話だ。当一には道を歩いているとき邪魔になるネコを蹴り飛ばしていそうな印象があった。

「あいつだって女の子よ。その認識はひどいんじゃない……」

シェールが言うには、リーシアの部屋に隠れてしまっているらしい。

「様子を見てきてくれないかしら？　私はリーシアの部屋には入れないから」

当一は、その言葉に従ってリーシアの使っている屋根裏部屋へ向かっていった。

リーシアが使っている屋根裏部屋は、昔は物置であった。

そこで、薪に火をくべて釜の中の黒々とした液体をかき混ぜているリーシアの姿があった。

それは普段の姿である。

人が納まりそうなくらいの大きさの釜をかき混ぜるのは、昔の魔女が薬でも作っているようなイメージであるが、それは洗剤を作っているところだったり、腰痛の薬を作っているところであったりする。

る。

当一はリーシアの部屋に入ると、リーシアに聞いてきた。

「メイディーっているか？」

「あら？ この薬の事はスルーなの？」

「どうせ洗剤かバンテリンだろう？」

つまらなそうにした後、リーシアは釜をかき混ぜながら答えた。

「ずっとあの調子よ。まあ、しょうがないけど」

ラタがジェズルに言うことを聞かせるために、ジェズルにあてがっていた女の子だ。

一緒に連れて帰ってきたものの、扱いには困っていた。ショックで口がきけなくなっていたので、上手くコミュニケーションをとる事ができないし、ラタやノエリアの事を怖がって、まともに下の階に下りてくることは無い。

「様子を見てみる？ 私もいろいろ試してみたけど万策が尽きちゃって……」

机がいくつかあり、その上にアルコールランプや遠心分離機などの調合器具が存在する。

戸棚にはフラスコや試験管が入っており、薬の調合に使っている部屋であるのが一目で分かる様子であった。

「私が部屋に入ると隠れちゃうのよ……ほら、いつもあそこに」

リーシアが指を刺す先には、部屋の隅にあるタンスの陰からこちらの様子をうかがっている女の子の姿があった。

髪は透き通るような青。もみあげからさがった髪にスズランの花の髪飾りをしている。大きい目は今は伏しがちになり、おびえた子犬のような様子である。

髪の毛は頭の上で結っており、少し埃っぽくなっている。

「メイディー。出てきなさい」

リーシアはメイディーに向けてネコじやらしをちらつかせながら近づいていった。

「って！ 何をやってるんだ！」

当一はリーシアのネコじやらしを取り上げた。

「こんなもんに人間が釣られるか！」

ネコじやらしをリーシアに突きつけながら言った。リーシアは、その当一に言い返す。

「私だってねえ。そんな事やったって無駄だって分かっているのよ！ 本当に万策つきているんだから！」

「でも、ネコじやらしは無いだろう！」

「なら何ならいいって言うのかしら！ かつお節かマタタビでも用意すればいいのかしら！」

「ネコからはなれろ！」

当一がネコじやらしを近くのゴミ箱に放り込んでから言う。

「俺が行ってみる」

前に進み出ていく当一。後ろからリーシアが「乱暴な事はしないでね」と声をかけるのを聞き、どうにもやりにくい気分になりながらも、メイディーの前に立った。

じっ……と当一の事を見上げるメイディー。

それに当一は精一杯笑って見せながら手を差し出した。

「俺達はもう仲間なんだ。怖がる事ないさ」

声が届いているかどうか分からないメイディーは、じっ……と、当一の事を見上げた。

当一は、笑顔を続けてその視線を受け止める。

メイディーは当一の手を取った。当一の手の感触を確かめるようにして両手で握る。そうすると、メイディーは当一の腕に飛びついてきた。

まるで、父親の腕から離れないようにしている子供のように、当一に抱きつく姿になったメイディー。それを見て、リーシアはうなった。

「何で……当一にはなついてくれるの？」

メイディーに近づくリーシア。そうすると、メイディーはリーシアから逃げるようにして、当一から離れてまたタンスの陰に隠れて

しまった。

「何で……私にはなついてくれないの？」

意外にも、リーシアは目に涙を溜めながらそう言った。普段のクールなイメージの彼女を見ていたら、この姿は別人ではないかと誰もが疑うだろう。

「当一……あの子、ここ数日間お風呂に入っていないの。協力して」目に涙を溜めたままのリーシアが言った。

当一が、腕にメイディーをくっつけながら風呂場の前まで行く。先を歩いて脱衣所に入っていくリーシアは言った。

「メイディー。お風呂に入るわよ」

リーシアがメイディーに手を伸ばすと目をつぶって怯える。リーシアは当一の事を見た。

「俺はここで待っててやるから、リーシアと一緒に風呂に入ってきてな」

当一はじっ……とメイディーの目を見つめる。透き通るような青色の瞳は、当一に見つめられると、硬くなっていた感じが少しずつ柔らかくなっていった。

当一が背中を押すと、メイディーはリーシアの待つ脱衣所に入っていた。

少しすると、中から声が聞こえてくる。

「こら！ おとなしくしなさい！」

この声を聞くに、リーシアが悪戦苦闘をしているようである。

「わわわ！ そこはだめ！」

（そこ？ どこのこと？ 何をやってるんだ？）

当一の脳裏に、不純な考えが浮かんた。メイディーが、リーシアのさわっちゃいけない場所にでも、さわっているのだろうか？

当一の顔が赤く染まる。

「もう怒ったわよ！ こうしてやる！」

リーシア……メイディーに何をやっているんだ……？ 当一は頭

を振って、頭の中を廻る不純な考えを振り払おうとした。

「いたっ！ 悪かったわよ！ もうおとなしくして！」

リーシアのその声の後に、中で二人が倒れる音が聞こえた。

「ちよっと待て！ 本当に大丈夫か！」

中の様子が気になった当位一は風呂場に飛び込んだ。

中では、リーシアとメイディーが折り重なって倒れていた。

「いたた……大丈夫よ……これくらい」

頭を押さえながら起き上がったリーシア。当一が風呂場の事を覗いているのを見つけた。

「きゃあああああああ！ 何入って来ているのよ！」

「中の事が気になったから！」

「出て行きなさい！ 今すぐに！」

「だけどさ……リーシアだったら……」

当一は言う。自分の中ではリーシアはこのような反応をとるようなイメージはなかった。

本来なら、リーシアはこう反応をとるはずだった。

風呂場でメイディーと折り重なって倒れているリーシアは、ゆっくりと当一の事を見上げた。

メイディーに後ろを向かせた後、リーシアは当一の前に、何も隠さないままに立つ。

「入って来いなんて言っていないわよ」

当一は、予想通りに冷静な様子のリーシアの事を見て。当一は安心をした。

「問題はないのか……？」

「メイディーに悪いから当一はすぐに出て行って。問題になるのはそれくらいのものね」

そして、リーシアは当一に顔を近づけ、ささやくように言い出した。

「この事は黙っておいてあげる。様子さんにばれちゃったらまたお

小言をもらうからね」

そして、最後にニヤリと笑ったリーシアは、こう付け加えた。

「その代わりに何か一つ私の言う事を聞いてもらおうかしら。後で私の部屋まで来てちょうだい」

リーシアは色のある笑みを見せながら、当一を風呂場から追い出した。

「なんて事になるんじゃないかと……」

当一が言くと、いきなり声のトーンが一つ下がったリーシアが言い出す。

「出て行かなくていいわ。そこになおりなさい」

そして、リーシアの前に魔方阵が四つ広がった。

赤、緑、青、黄。四色の魔方阵は、力をが小さくなっているのが見て分かる様子で、どんどん強い輝きを持っていく。

「私の最強術を見せたことはあったかしら？」

魔方阵の中から、それぞれ剣が生み出された。燃える赤い剣。透き通った色の水の剣。赤銅色の岩の剣。透明度の高いガラスのような色の空気の剣。

ソードフルエレメンタル

四つのエレメントそれぞれの剣を魔法で作り出し、それで敵を切りつける攻撃である。

「私だって女の子だ！　ばかぁ！」

リーシアは、当一に向けて四つの剣を飛ばしていった。

姉妹の力

それから、ノエリアの回復魔法で体の傷を治した当一。

「痛みが完全になくなるってわけじゃないのか？」

立つことができず、当一はリビングのソファに寝転んでいた。剣で何回も切り裂かれ、ズタズタになった当一であるが、ノエリアの法術で傷一つ残っていない状態になった。

だが、体がキリキリと痛む感覚は、まったく消えていなかった。ノエリアが、当一に向けて言う。

「法術というのは完全に元通りにするものではありません。完全に元に戻すことなんて、魔法のようなことは不可能ですわ」

「俺には法術そのものが魔法みたいな感じだけだな」

ノエリアに言わせれば、法術による傷の治癒は応急処置のようなものらしい。見た目を治す事ができるだけで、体のダメージは、時間をかけて抜いていくしかないのだという。

「それでも十分便利だけだな……」

当一はそう言いながらリーシアとシェールの事を見た。

二人は当一が怪我をしたことでもめているようで、その事で当一の向かいにある、リビングの向かいの席で言い争っていた。

シェールはリーシアに向けて言う。

「これじゃ当一は戦えないじゃない！」

「正当防衛よ！」

「あんたなら、サラリとかわして、『女は見られて美しくなるものよ』とか寒くなるような事でも言っただけでガン見せしてればいいじゃない！」

「シェール！ あなたも言い出すの！ 私だって女の子だ！」

リーシアは泣きそう顔をしながら言っていた。リーシアの表情にあすがのシェールも身を引くほどである。

当一が動けないという事は、エスカッションが動けないという事

であり、敵との戦闘ができないという事でもある。

当一がうごけなくなった事でもめている二人だが、その仲裁にラタが入っていった。

「いいじゃないですか。今日はヤボ用をこなすためにレイグネンに行くことにしましょう」

レイグネンに行くのは、戦闘のためだけではない。リーシアであれば、魔法の草を買うために町を買い物をする日だって必要になるし、武器が壊れれば、新しいものをレイグネンで仕入れなくてはならない。

「今回は重要な用もありますし」

ラタはこの部屋のドアを見た。部屋のドアに張られた窓ガラスから中の様子を窺っているメイディーがいる。

「彼女を実家に送り返してあげます。私が近づくと怖がってしまうのでどちらかがついてきてください」

ラタは横目でメイディーの事をうかがった。ラタが顔を向けるとメイディーは怖がって隠れてしまうので、慎重に彼女の事をうかがう。

ラタは、彼女なりに罪悪感を感じているのだろう。

「いいわ。ついて行ってあげる」

メイディーの手を引いて実家に連れて行く役目を請け負ったシェール。それにリーシアも続き、結局は全員でメイディーの実家に向かうことになった。

壁に囲まれた町の中にメイディーの家があった。

メイディーの家は、ちよつと裕福なくらいの中流階級といった感じだ。木造で平屋の家であるがそこそ広い。

木を組んで作った柵が、家を囲んでおり、周囲には同じような家が並んでいる。この国の中流家庭の団地のようなものだろう。

全員の様子は、シェールが先頭に立ち、リーシアが手を引き、そのずっと後ろをラタとノエリアがついてくるという微妙な位置関係

である。

シェールが家のドアをノックすると、ドアを開けたのは見覚えのある顔だった。

「ディーリア。お邪魔するわ」

最初にシェールが倒した候補者であった。ディーリアは、今は戦いから放れて普通の生活に戻っている。

ディーリアはメイディーの双子の妹だ。

ディーリアと同じ透き通るような青い髪をしている。目元口元は、どちらかというシェールのようなであり、気の強そうな印象がある。髪は短く切り揃えており、もみ上げから下がった髪に、スズランの髪飾りをくくりつけているは同じであった。

学校に居た頃から、二人はいつも一緒にいる仲のいい姉妹として有名であった。学校で授業を受けていたシェールも、その事は知っていた。

「こんな形での再会になったのは残念だけど……」

シェールは言った。

ショックで口のきけなくなっている状態で対面をするのだ。メイディーを前に出すと、ディーリアは不思議に思っメイディーの顔を覗きこんだ。

「姉さん？ どうしたの？」

まったく言葉を発さないメイディーを見て、そう言ったディーリア。

「私達がやったんです」

後ろから出てきたラタとノエリアが言う。

「いいわ。あなた達は出てこないで……」

シェールは手で二人が後ろから出てくるのを制した。ラタはそれでも前に出ようとした。

「しかし……」

「あなた達の主人を信じなさい」

シェールはラタとノエリアに言う。ラタとノエリアは、それで、

後ろに下がった。

「こういう事があったの」

シェールはそう言うと、事の？末を話し始めた。

「そんな……」

ディーリアが呻きながら聞く。ラタが自分のジェズルを飼いならすためにメイディーを使っていた事。メイディーは、鎖につながれる生活をしていた事。ジェズルにさんざんにもてあそばれたために、そのショックで口をきけなくなったこと。

「よくも……」

ディーリアは、ラタ達をにらみつけた。だがそこでシェールが言う。

「こうなる事は覚悟で、あなたも参加をしたはずよ」

戦いに負ければ、相手の言いなりにならねばならない。そんな事は分かっている参加をしたはずだ。今になって、その事に文句を言いつ出すのはお門違い。

シェールはそう言いたいのだろう。

だが、そんなもので納得できるものではないだろう。ディーリアは、ラタを睨んだ目をシェールに向けなおした。

そこに、シェールの後ろからメイディーがディーリアに向けて飛び込んでいった。

首元に飛びついたメイディーは、ディーリアに向けて耳打ちをした。

「え……そうなの？」

さらに、耳打ちを続ける。

「え……そんなことが？」 「あの人なら私も会ったけど……」 「姉さんがそう言うなら」

何かの相談を二人で始める。その様子を、ほかの四人は不思議に思っで見つめながら聞いていた。

そして、相談が終わると、ディーリアはシェールに向けて言う。

「私達もシェールさんの所でたたかわせてくれませんか？」

ラタとノエリアの二人が、ディーリアとメイディーの二人とにらみ合っている。

ここは壁の外。南側の場所なので、乾いた土の上に枯れ草が生えていて足元はしっかりとしている。

街道からはずれると、膝元まで伸びる草が生い茂った場所になっていたため、冬になると、こうなるのだ。

お互いに枯れ草を踏みしめながら、武器をかまえてにらみ合っていた。

「ラタ。手加減をするんじゃないわよ」

「わかっています」

ディーリアがシェールに申し出てきた事は、シェールには受け入れられない事だ。

ディーリアは、シェール達とは違って学校出である。戦闘能力ではどう考えてもシェール達に劣る。足手まといになりかねない。そのため最初は断っていたシェールだが、二人は、一緒になって戦って真価が発揮されるのだという。

ただのはったりではないだろうか？ シェールはそう思うが、二人の力を試してみる事にした。最初はシェールとリーシアで相手しようと考えたのだが、試験官に自ら志願をしてきたのがラタとノエリアである。

「はじめてちょうだい」

シェールが言うと、ディーリアとメイディーが二手に分かれた。右と左に分かれて自分の横に回った二人を見て、ラタは右にいるメイディーに向かっていき、ラタの後ろにノエリアがついていった。メイディーは、ラタの攻撃を真正面から受けるかまえを見せた。

それに、思いつきりラタが打ち込んでいった。

ラタの攻撃を真正面から受けたメイディーは、ラタの攻撃を受けきった。

「基礎体力は十分ね」

ラタの攻撃に耐えきるだけの体力はメイディーにあるようだ。シエールはそう分析をする。

ラタは剣を押し込んでいく。さすがにつばぜり合いになるとラタに分があるようだ。

だがそこに背後からディーリアが飛び込んでいった。

ラタの背中を切りつけるために飛んで切りかかるが、攻撃はフェイスメイルによって阻まれてしまう。ディーリアの次の攻撃は素早い。まるで、流れるような動きでガンガンと斬撃を叩き込んでいった。

カンッ！　カンッ！　カンッ！

一気に叩き込まれてフェイスメイルは粉々に碎ける。

メイディーと押し合いをしているラタの背中に、ディーリアが打ち込んでいった。ラタはメイディーとの押し合いをやめ、サイドステップで距離をとった。

メイディーとディーリアはラタの前と後ろに立ち、挟み撃ちをしていく。

メイディーとディーリアは、まるで、二人が同じ器械で操作をされているかのように、同時に剣を振り上げ、まったく同じ斬撃を、ラタの正面と背後から、同時にたたきつけた。

「そこまでよ！」

シエールが言うど、全員がピタリと動きを止める。

これから先の勝敗が一目で分かる姿。

ラタは二人の剣で、両脇を切断される直前のような姿をさらしていたのだ。

幕間

レーズは夜中に、安い酒場にいた。

どぶろくを、口の端から零しながら一気に飲み干すガラの悪い男。それが数人集まっている中、魔法のローブを着て豪華な飾りの付いた服を着たレーズが同じテーブルに座っていた。

ここは、土塗りの壁で無骨な木材がむき出しになっている家屋で、テーブルの中心においてある一本の蝋燭が唯一の光源である場所だ。ほのかにアルコールの匂いがして、白く濁った色をしている安い酒のどぶろくを、ヒビがはいった器になみなみ注ぐ。その男が器を持つと、どぶろくがこぼれるが、男はそんな事は気にせずに、服にこぼしながらどぶろくを一気に飲み干した。

「そろそろ、もうちょつといい酒が飲みたくなってきてな」

男達の中で頭目らしき男が言う。ヴィッツは苦い顔をしながら答えた。

「支払いは前回の最後まではずだ」

このゴロツキは、ヴィッツがなる前にリーシアの師であった、レーズを殺すのに手を貸した男だ。ヴィッツは、この男に脅迫をされ、金を要求されているところである。

「それに、それをバラしたら、君らだって捕まる事になるぞ」

ヴィッツは男にそう話す。だが、その男は涼しい顔をしてニヤリと下品に笑った。

男の要求はこうだ。リーシアの師を殺すのに手を貸した事を裁判所にたれこむ。たれこまれたくなけりゃ金を出せ。

「別に俺ら全員で行くわけじゃねえ。俺達のために、こいつが代表をして裁判所に行ってくれるらしい。俺達は逃げさせてもらうのさ」

痩せた体の、いかにも気弱そうな男の肩を叩きながら、頭目の男は言った。

そう言われて、痩せた男はヴィッツに向けて硬い苦笑いを送った。この痩せた男を鉄砲玉に使うつもりらしい。事件が発覚したらヴィッツは、リーシアの師を続ける事はできなくなる。

痩せた男は捕まるが、頭目たちはどこかに逃げていけばいい。ヴィッツの事を陥れるため。つまるところ、ヴィッツへの嫌がらせのため、そんな小さな事のためだけに仲間を犠牲にする。それに心が痛むことはない。

まったくもって、汚い人間らしい汚い方法だ。

男達の中の一人が、喉を押さえて苦しみだした。

「僕も、出せる金には限度があるんだ。欲を張らなければこうはならなかったのにね」

ヴィッツがそう言うと、次々にほかの男達も苦しみだした。

ほかの男達は絶命し、ヴィッツだけが生き残った。床に横たわる男達を見回し、ヴィッツは言い捨ててからここを後にする。

「ゴミ共め」

それを魔法の鏡を使ってみていたリーシアがいた。今よりもまだ幼い彼女は、子供らしい柔らかな顔の輪郭をしていながらも、それには不釣り合いな、何もかもを疑うような鋭い目をしていた。

彼女は夜の暗い中、屋敷の庭で鏡の中身を見ていた。

ヴィッツが、夜に出かけているのを知り、ヴィッツに発信機をつけてその様子を探っていた。

そして、この映像を見る事になったのだ。

「ゴミはあなたもでしょう？」

腐った人間達の腐った戦い。

リーシアはそれを見て、なんともつまらないものを見せられたような気分になった。

ゴミ掃除

シェールは、ラタと同じように上下ジャージ姿で家の廊下を歩いていたところを、リーシアに見つかった。

「シェール……ジャージ怪獣ズボラーになる事をいつの間に受け入れてしまったの……」

「そんなわけがないでしょう！」

ならば何で、上下ジャージで家をうろついているのか？ 普通に考えればただのズボラである。

「用意はできたか？」

そこにジャージ姿の当一まで現れる。

「ズボラーが増殖中かと思っただけど……」

リーシアは、当一が手に持ったゴミ袋とトラバさみを見る。これから町の奉仕活動にでもいくのであるうというのは推察できる。

「立派に社会貢献をなさっているようね。ズボラーの汚名は返上かしら？」

リーシアが言う。

「最初から、私はズボラーじゃないっての！」

リーシアがくすくす笑って、二階にあがろうとしている所に、ラタが声をかけた。

「揃いましたね。我らがズボラーズリー」

「誰がズボラーズリーだ！」

麦藁帽子に上下ジャージといういつもの服装をしているラタは言った。サラリとシェールに言ったズボラーズリーの言葉に、シェールは律儀に返す。

「今から戦闘です。みんなで力を合わせればすぐに終わりますよ。我々の愛と勇気の力を信じましょう」

「何よ、その戦隊物のノリは！」

シェールがやかましくラタの言動に文句を言っている。当一は、

日曜の朝にやっていた全身タイトのような戦闘スーツで戦う、五人組の出てくる番組を。ラタが目を輝かせながら見ていたのを思い出した。

「そうだ！ 私達の力を信じるんだ！」

そう言い、ラタはビシリとポーズを決める。それに会わせて当一もポーズをとった。

いつもは無表情のラタだが、このときからは楽しそうにして口元をすこしだけゆるめた。

「シェール。あなたも参加をしてあげたら？」

クスクスと笑いながら言うリーシア。

「そうだぞ。『踊るあほうに見るあほう。同じあほなら踊らにやそんそん』という、格言もあるしな」

当一も言う。

「そうです。遊んでふざけて、楽しんだもの勝ちです」

それに合わせてラタも言う。

「勝手に楽しんでいなさい」

そう言い、シェールは先に歩いていった。

ノリの悪いシェールに、当一とラタは顔を見合わせた。

「しょうがない。他に素質のある奴を探す事にするよ」

当一は適当に、戦隊物の言いようで、シェールを無理やり誘わない事を言った。

「あなたならば、ズボラグリーンになれると思うていたのですが」
「って、あんたが渡したジャージでしょう！ あんた！ 私をズボラグリーンにするつもりでこれを渡したの！」

思えば、当一は青、ラタは赤、シェールは緑のジャージを着ていた。

「それではいくぞ！ズボラブルーこの世界の平和のために！」
やけに大仰な言いようで言うラタ。

「リーダー！一生ついていくぜ！」

その言いように合わせて、当一も答えた。

「それじゃありーシア。行ってくるな」
言った当一。それを聞くと、リーシアは屋根裏部屋に上がっていた。

リーシアは家の庭に立った。前には、ノエリアが立っている。これから魔法を使う。そのために、リーシアはいつもの魔法のローブを身に着けていた。

これは、魔法の威力を上げる効果もあり、これからの実験の精度を上げるためには着たほうがいい。

当一の家の庭では、二人が向かい合わせになるので精一杯の広さしかない。慎重に行わねば周りに被害が及んでしまう。

「それじゃあいくわよ」

リーシアが言うと、ノエリアは視線を上に向け、何かを待ち構えるようにして目を見張った。

空の上からファイヤーボルトが飛び込んできた。

ダン！　ダン！　ダン！

硬い音が聞こえ、ファイヤーボルトはノエリアのフェイスメイルに阻まれていった。

「正直……このままでも、あと二、三発は耐えれそうですわ」

緊張を解いてリーシアに向けて言ったノエリア。

それを聞くと、リーシアはもみ上げから垂れ下がった紫色の髪を弄ぶ。顔を思案させているように歪めながら言った。

「だけど、相手のファイヤーボルトは一発で貫通したんでしょう？」
先の戦いで、ノエリアは敵のファイヤーボルトに倒された。

だが、ノエリアのフェイスメイルは強固な守りなのである。どう計算をしてところで、フェイスメイルが一発で壊れる事などはありえない。魔法の事は、リーシアの方が詳しい。

リーシアが言うには、フェイスメイルをファイヤーボルトで打ち

破るのは不可能らしいのだ。

「次はウォーリアの件を試してみましょう。ディーリアにメイディー。お願いね」

リーシアが言うと、ディーリアとメイディーは二人で同じ剣を持った。

息を合わせた二人は、二人で一本の剣を振りかぶると、飛び上がり、ノエリアに向けて剣をたたきつけた。

だがそれは、フェイスメールによってはばまれる。

「余裕です」

ノエリアは言う。

リーシアは髪を指に巻き、それを解き、それを繰り返しながら思案にふけていた。

「だけど、ウォーリアの攻撃は防げなかった」

リーシアは、シェール達に聞いていた。

ウォーリアがラタにバトルアクスをたたきつけると、一発でフェイスメールが破られたのだ。

フェイスメールを破るには、フェイスメールを貫通する威力の攻撃をするか？ 攻撃を何発か繰り返して魔力切れを起こさせるか？

どちらかしかない。

フェイスメールを破るための、何かの仕掛けがあるのだろう。

「魔法剣の類か……」

原因は一体何なのか？ リーシアは考え始めた。

奉仕活動はいくつかの班に分かれて場所を分担してやるものだった。

四つある班のなかから、シェールとラタと当一は、別の班に分かれることになる。

この奉仕活動は、町内のレクリエーションの意味も兼ねているため、友人と一緒に来た者同士は、むしろ離される事が多い。

ラタが入った班には、とてつもなく目立つ風貌の女の子がいた。

「あなたは……」

その女の子は目を閉じて唇を引き結び、こめかみに力を入れる表情をして思いっきり苦々しさを表現する。

背が高く、金髪に金色の目をしている姿は間違えようがなかった。

「エイディエルだ……」

短く自己紹介をした彼女は、班長になったオバサンの言葉が終わるまでずっとその表情をしたままだった。

シェールは、同じ班になった女の子の事をマジマジと見つめた。

シェールの視線にあとずさったその女の子は、困惑をしながらも一応挨拶をする。

「こんにちは……」

「え……ええ。こんにちは」

実際、困惑をしているのはシェールも同じである。

緑の色がかかった髪。背が低く気弱げな表情をしているその子は、居心地が悪そうにして指を絡めて、手を組んだ。

「チェリンです。よろしくおねがいします」

不器用な礼を一つ見せ、挨拶をしてきたのだ。

ゴミ掃除 2

リーシアは、家の前に気配を感じた。

「ディーリア、メイディー二人ともお願い」

庭で、フェイスメイルについて考察をしているときの事だ。家の前で中を探っている人間がいるのに気づいたリーシアは、外に向けて魔法を撃った。

スクリーム

かけられている魔法を、まとめて霧散させる魔法だ。

まるで、うずしおの様子を水の中からとらえたように、空气中に渦が生まれていく。その渦の中から、桃色の髪をした人影が現れた。その人影は、逃げ出していった。

アースウォール

まるで、土の山のようにアスファルトが盛り上がる。

それに行く手をはばまれた人影は、背後から迫ってくるリーシア達を見た。

「人の家の前で、一体何をしていたのかしら？」

リーシアは、聞く。相手を囲んで、左右にメイディーとディーリアが立った。

それは、レイグネンで戦ったアサシンであった。右の頬に大きなあざを作った顔は間違えようがない。

「この大地の上は誰のものでもないはずだ。権利書なんていう紙一つで自分のものなどと主張するのは、間違っているとは思わないか？」

「それはどんな屁理屈よ……？」

「金さえ持っていれば、何でも自分のものにできると思っている、お前らが間違っているんだ」

リーシアは今の一言で、大体話が読めた。

こいつらは社会のゴミだ。

彼女らと、一度対峙をしたとき、彼女らの風貌を見たことがある。ボロボロの服を着ているくせして、魔術師の被っていたフード。それにエイディエルの持っていた戦斧は、高級品であると分かるものだった。

そして、いま、このアサシンのアイシヤが着ているマントだってそのようである。

まるで、それだけではどこから盗んできたものようであった。「ならば、盗めば自分のものになると思っているあなた達は間違っていないのかしら？『そのマントは今誰の物なの？』」

リーシアが言うとい、無表情ながらも、アイシヤは言葉に詰まった。

そして、目に憎悪のようなものが浮かんでいく。リーシアにはそれが分かる。

こんな事、こいつに言ったところで分かるわけがない。そう思いながらもリーシアは言った。

「この世界はルールによって成り立っている。金で土地が買えるというルールがあるから、金で土地を買う。それだけの話よ」

「お前達だけのルールだ。私達にまで押し付けるのはやめろ」
リーシアはなおも言う。

「『盗んだものは盗んだ人間の物』という、あなた達のルールを押し付けているじゃない」

その盗品のマントを着ながらよくも言えたもんだ。

口ではそう言わないが、リーシアはアイシヤに伝える。

「私達はルールを守る事によって自分達の命を守っているの」

「私は、ルールに守られた事が無い」

「ルールを守らない人間が、ルールに守ってもらおうとは思わない

ことね。そういう事は、善良な市民として生活をした人間だけが言っているセリフよ」

憎悪の視線を向けるアイシャ。リーシアはこの視線に心当たりがある。

アイシャは、単純に金持ちを憎んでいる。

金の力で自分達の上に立つ奴らが許せないという気持ちがあるのだろう。

リーシアが昔見たゴロツキだって同じだ。

『金があるんだからいいだろう。お前だけがいい目を見るなんて許されない。俺にもおこぼれをよこせ』

そう考えていた。それで、何度もヴィッツに脅迫をもちかけた。そして、堪忍袋の緒が切れたヴィッツにより、酒に毒を混ぜられて殺されたのだ。

「消えなさい。勝負はレイグネンでつけてあげる」

アースウォールを解き、地面の盛り上がりに戻して道路を平らにしたリーシアが言った。

アイシャは、何も言わずに道を走って消えていった。

リーシアがアイシャの姿が見えなくなるまで見送る。として振り返るとそこにプレッシャーを放っている様子が立っていた。

「リーシアちゃん。そのカッコで出歩かないでって言うておいたはずよね。ご近所様から変な目で見られてしまうから」

リーシアが着ている魔法のローブ。これを、着たまま出歩かないように言われていたのだ。

「まず、家の中にいらっしゃい」

ガチガチになりながらのリーシアは、様子に言われるままに家の中に入ってしまった。

ギスギスしながら、ラタとエイディエルの二人はドブさらいをしていた。

鍬を使って溝に入った土をかき出し、その土を分厚いビニール袋

に詰めていく。これは埋めるゴミとして出すのだという。

コンクリートできていて蓋を外し、かき出したらまた蓋を閉めなおすという結構な重労働だ。

長い間黙々とこなしていたラタだが、エイディエルに向けて聞いた。

「なんで、奉仕作業に参加を？」

「作業が終わったらトン汁が出るって話だったからな」

いきなり核心については聞きづらい。ラタは挨拶程度の質問をした。エイディエルはそれに答える。

「私達は、食うものは自分で調達をしなければならない。ずっとそうしてきたんだ」

「この労働は、トン汁一杯には見合いませんよ」

「口に何かを入れる事しか考えていない。私達が生きるには他の事は二の次だ」

ラタは考える。他の事というのは、盗みも入るのだろうか？人を傷つける事もあるのだろうか？

ラタはこれを聞こうとする、唇が震え、心臓が高鳴っていく。意を決してラタは聞いた。

「他の事というのは……」

「ああそうだ。盗みだって入る。強盗だって入る」

ラタの背筋にゾクリと悪寒が走った。

「そうしなければ、私達は生きていけなかった」

エイディエルは言う。これは何度も聞く言葉だろう。

（貧しい人間は、こうしなきゃ生きていけない。こうするのは彼らにとって、当たり前のことなのだ）

こう、何度も聞いたことのあるフレーズが、ラタの頭に浮かぶ。

「それだけで納得のできるのですか」

「謝罪はできない。この生き方を改めて全うな方法で生きることなんて、私達には不可能だ」

ラタが言った事に、エイディエルは答えた。ラタは心臓が高鳴る。

「もしかしてあなたは……覚えているのですか……？」

「私は靴を奪った。使用人の片目を傷つけた」

ラタは、グツッと歯を噛み締めた。

「あなたには罪をつぐなってもらいます」

「ああ。全力で来るといい。私も遠慮はしない」

のれんに腕押しと言っているような感覚である。恨み言をいくら言っても軽く流されていってしまう。ラタには、怒りのぶつけ先がまったく見つからない。

「お前には話しておきたい。できれば聞いてほしい」

ラタは何も返事をしない。それでもエイディエルは話し続ける。

「私達は吹き溜まりに生まれた汚れた人間だ」

エイディエルの話の冒頭はそうであった。

エイディエルは、吹き溜まりに住む人間の醜さを嫌というほど見てきた。そして、自分がその吹き溜まりの人間の一員である事をひどく嫌悪していた。

こんな町はなくなってしまえばいいと思っている。

忌々しいのだ。この町の醜さが忌々しい。そして、この町でしか生きるこのできない自分も大嫌いだ。

たまたま、自分はこの戦いに参加する権利があった。王になれるチャンスを得ている自分は、この国を好きなように作り変える事ができるかもしれないと思うと、胸が高鳴ったのだという。

この国を好きにできるとしたら、自分が最初に望むことは一体何であろうか？ そう考えると結論はすぐに出た。

「私が王になったら、レイグネンからスラム街を抹消しようと思っている。あんな場所は無いほうがいいんだ」

ラタは無言でその話を聞いていた。何を考えているのか分からない顔。もしくは何も考えてなどいないのかもしれない。

彼女は、深い闇のある無表情をしていた。

シエールは無言で箸を振っていた。

すぐ隣にチェリンが立ってくる。それから顔を背けるようして、体の向きを変えた。さっきから何度もそうしながら掃除を続けていたのだ。

「どうして私から逃げるんですか？」

シエールは、ぶっきらぼうに答える。

「あなたが敵だからよ」

その答えにチェリンは、どうしてだか、笑って答えた。

「よかった……私がスラム街の人間だから避けているわけではないんですね」

シエールは箒を動かす手を止めた。

「私はチェリンって言います。スラム街で育ったんです」

シエールは、チェリンの言葉を無視して箒を振った。シエールはチェリンの言葉に耳を貸す様子は無い。それでもチェリンは話を続けていく。

「スラム街の人間っていつでも悪い人ばかりじゃないんです。みんな仲良くできるはずなんですよ」

「敵と仲良くしろというの？」

「この戦いが終わって、私達が敵ではなくなったら、仲良くしてくれますか？」

警戒をしているシエールは、チェリンの事を見定めるようにして、じ……っと睨んだ。

スマイルを浮かべるチェリンの顔が、シエールの目に映る。

「私達はきっと王なんかになりません。あの魔術師さんに九人中四人もやられてしまってるんです。よほど運がよくないと……」

チェリンはそのまま言う。印象をよくしようとして、無理やり顔に貼り付けた笑顔。それを変えないまま、言い出したのだ。

「私には他にこの戦いに参加をした理由があるんです」

それから、チェリンは慣れない営業スマイルのまま言い続けた。

この戦いに参加をしているのは、貴族や豪商などの上流階級の人間の子供である。

スラムで暮らしているチェリンには、そんな者達と会う機会なんて、何があっても訪れないだろう。

この戦いをチャンスを考え、貴族や豪商の人間に自分達の住むスラム街をどうか嫌われないように訴えたいというのだ。

「確かに、私達の中にはそういう人もいます。だけどそんな人だけでもないんです。絶対に私達は手を取り合っていると信じています」
シェールはチェリンに背中を向ける。

その背中に、チェリンは言葉を投げかけ続ける。

「この戦いが終わったらでいいです。どうか私達の事を『認めて』
ください」

無言で背中を向けるシェールに向けて、チェリンはペコリと頭を下げた後、掃除を再開した。

ゴミ掃除 3

当一は、一つの袋を二人で共有して使っていた。

自分がそれを持ち、一美が拾ったものを放り込む。当一達は、町に落ちているゴミを回収して町内を回っていた。

「本当に奇遇だったな。お前もこれに参加をしていたなんて」

「それを言うのは、これで五回目だぞ」

嬉しそうにして、町の掃除をする一美と、あきれた様子の当一。

一美は、当一の隣に立って今回決められたルートを回っていた。

「この辺はここまでにしましょう、次のところにいきます」

この班の班長が言い出す。

次の場所に移動をするために班の全員で道を歩く。一美は、すぐ隣に当一がいる事を横目で確認した。

そして、視線を下に落とす。軍手をつけたままの彼の手を、一美は見た。

和美は、当一の手を握ろうとして手を出した。

一步一步でもいいから、当一との距離を縮めていこうと思っている。

すぐ隣に立つ一美は、ほのかに感じる当一の温かみで、頭がくらくらしてきた。寒さが体が冷え切り人の体温に敏感になってしまっている今であるからこそ、それを強く感じられるのだ。

ずっとすぐ隣にいるのに、今まで手を握るのだけはためらっていた一美だが、手を伸ばした。

一美の手が当一の手を掴む。ゴミ袋を持った手は、硬く握られていたが、それでも、木綿の布越しに感じられる、彼の温かみをほのかに感じる事ができた。

それだけの事であるのだが、和美は心臓が強く高鳴り顔が熱くなってくるのを感じていたのだ。

「どうしたんだ？ 二人で持つか？」

当一は、自分の手を握った一美に向けて言った。

ゴミ袋を持つのを手伝うつもりで手を伸ばしただけだと、当一は思ったのだろう。

一瞬で、体の内から湧き上がってきた熱を冷まされた一美。

『このバカは……』

心の中でそう思い、ムカムカしながら歩いていったのだ。

その日の夜、湯船につかりながら、ラタは考えた。

髪が湯につからないように頭の上で結い上げている。肩まで深く湯に浸かり、揺れる水面を眺めながら、エイディエルの言った事を思い出した。

この国からスラム街を無くす。この国のゴミを掃除する。

そんなものは傲慢であるように思えた。

どんな場所であれ、人が生活をする場所、そこは、そこで生きる人々には、かけがえのない場所であるはずなのだ。

それを壊そうとする。それはあそこの出身の人間であろうと許されるものではないように思える。

だが、あの場所の事は、断片的にだがラタも知っている。

それにエイディエルは、もっとあの場所の深いところまで見ているはずである。もっとひどい部分を見ているはずなのだ。

誰かにこの事について聞いてみよう。そう思い、今日はやたらと重く感じる体を上げて、風呂からあがっていった。

「当一。入りますよ」

ドアをノックしたラタは、当一の返事を待たずにドアを開けた。

「なんだよそうぞうしいな」

あえて、おちついて入ってきたラタだったのだが、当一にはラタが、なにやら急いでいるように感じたようだ。

パソコンの前に座っていた当一だったが、ラタに姿勢を向けた。

まるで、ラタがこれから話をしようと考えているのが分かるようすである。

ラタはそれに合わせて話を始める。

「当一、もしですよ。スラム街を取り潰したとしたらどうなると思いますか？」

「ん？ いきなり何を聞くんだ？」

「理由は聞かないでください」

ふむ……と言ってあごに手を当てる当一。彼は淡泊な人間である。聞くなどといえば、無理に聞くことはないだろう。

そのくせ彼は、無駄に博識である。彼ならば正しい答えを教えてくださいませんか、ラタは思う。

「取り潰すってのはどうするんだ？ 住人を追い出すのか？ それとも建物を壊して更地にするのか？」

「住人を追い出して更地にします」

エイディエルだったら、やるなら徹底的にやるだろう。そう考えてラタは言う。

「更地にテントが建つ想像しかできない」

当一は言う。

「テントは取り壊します」

ラタは言う。

「それは日本でも行われていてな。実行予定日になると、テントが全部引き払っているんだ。それで、国の職員が帰るとまたポツポツとテントが建つ」

「それでは、どうしようもないではないですか……」

当一は、ラタがそう言うのを聞いて、腕を組む。

「どうしようもない……。そうは言うが、元々スラム街を取り潰すのはどのような理由からなんだ？」

「……」

当一の質問。これは、基本的すぎる事をわざわざ確認しているような質問であるが、確信をついている質問なのだ。

そもそも、何のためにスラム街を取り潰すか？　それが明確でなければ何をもって計画の成功なのかが分からない。

「たとえば、スラム街の住人を全員いなくする方法はありませんかね？」

「それはスラム街の住人を皆殺しにするって意味か？」

「そんな事はせずに……別の場所に移ってもらえば……」

「すぐに戻ってくるな。そしてテントを張ってそこに住む」

当一に聞けば聞くほど、絶望的な答えしか返ってこない。

結局、今の今までスラム街が野放しにされているのには、それなりの理由があるのだ。

幕間

シェールの住んでいる町は、城壁に囲まれていた。その中には大手を振って剣を振り回せるような場所はなく、剣の稽古の時は城壁の外まで出て行く事になる。

城壁の外に出ると、林がある。

木が等間隔に植えられており、十分に陽射しの漏れてくる林でシェールは剣を振っていた。

「そこまで！」

スタークの声が響く。

シェールは剣を下ろしてスタークの方を向いた。

「それ以上の訓練はするな。すぐに帰るぞ」

スタークは剣を腰に挿しているスラリとした長身の男だ。だが、剣を使って戦う者らしく、性格は荒っぽくぶっきらぼうな言動も多い。

「ええ……と。レーズの奴から言われていたんだっけか……」

そう言うと、スタークは紙をシェールに渡した。

「王をめぐる戦いに参加をするなら知っておかなければならないことがある。これは『シール』の事だ」

紙にはユニコーンやグリフォンなどの幻獣が書かれている。そのイラストを見ながら、シェールはスタークの話聞いた。

シールとはお守りの意味である。

先の王をめぐる戦いでは、このシールが重要になった。

シールはユニコーンやグリフォンなどの、昔の英雄を助けた獣の姿をしている。それは呼び出した者が自由に操ることができたのだ。単純な話、歩兵よりも騎兵のほうが強い。そのため、シールを持つ参加者は通常の参加者の六人分の強さを持つなどと言われ、戦いは、シールを多く集めたほうが勝つ結果となる事が多かった。

「この事は覚えておけ」

こういった、口で何かを伝える授業は苦手なスタークの、最後の言葉がこれである。

不器用な彼が精一杯に伝えてくれた教えを、シェールは深く胸に刻み込んだ。

絶対攻撃

「私達に有利なところは、数くらいだ……」

エイディエル組の面々は、夜に一本のロウソクを光源として使いながら、それを囲んで話し合っていた。

全部で九人の彼女らは、エイディエルを中心にして集まったスラム街出身の集団だ。全員が着古した服を着ており、眼光が鋭い。野性味を感じる彼女らは、いままでいくつもの苦境を乗り越えてきたという、雰囲気が存在していた。

その中で、三人だけが少し違う雰囲気を持っている。

アイシャ。

彼女は右の頬にできあがった大きな痣が印象的である。他の者達のように野犬のような雰囲気を持つ者達の中で、飛び出た鋭さがある。

彼らを野犬とするならば、それよりは一つ上の、豹やジャガーのような、俊敏な肉食獣のような雰囲気を持っていた。

そしてチェリン。彼らとは違いおだやかな目つきをしている。

まったく周囲の仲間達とは違う雰囲気を持っており、野犬の群れに羊が迷い込んでいるようにすら感じるほどだ。

そして、エイディエル。

野犬や豹など、そういった者達とは格が違う。

苦境を知り、泥をかぶりながら生きてきた彼女らの中でも、どこかに高貴さや綺麗さを持っている。

黄金のライオンのような雰囲気である。アイシャは一度、彼女の事をそう表現した。

橋の下に、ゴミ捨て場で拾った毛布を敷き、橋を車が通るとパラパラと砂埃が落ちてくる。

その中で、全員の視線を集めているエイディエルは、苦々しい顔でいい始めた。

「私の『隠し技』見せていない私の『エスカッション』その二つを上手く使うしかない」

エイディエルは言う。アイシャに視線を向ける。

「前回の襲撃は、奇襲の形だったから上手くいった……警戒をされるかもしれないが、奇襲に賭けるしかない」

アイシャは言う。

エイディエルのエスカッションは、高低差が大きい場所であると上手く戦えるのだ。

相手のエスカッションは平地でならともかく、あの狭い道では自由に動くことができないようだ。同じ場所で襲えば地の利はこちらが持つ事になる。

「あとは、あの魔術師さんです。味方がやられてしまう前に倒しておかないと」

チェリンが言う。

リーシアは一人で味方の半分を倒した、自分も、リーシアの魔法をもらっているため警戒が強いのだろう。

「魔術師に対する対策なんて簡単。私の『デッドリーポイズン』を使う」

アイシャはアサシンとして毒の製法をいくつか知っている。リーシアに向けてそれを使うつもりなのだろう。

「今回の戦いは過酷なものだ。だが、これは当然なんだ。自分達とは桁が違う訓練を潜り抜けて来た者達と戦って勝っていかなければならない」

エイディエルは、みんなに激励を送った。

「私達は、敵に勝てる力を持っている。後は君らの意志だけなんだ」
威風堂々をしたエイディエルの激励の言葉は、スラム街出身の野犬の群れを戦いに狩り立てる。

「エスカッションを見られた。相手のエスカッションは分かっているわ」

電灯の明かりの下で、シェール達は次の戦いの相談を始める。

当一の家のリビングで、

シェールが立ち上がって話しをして、リーシアが一人ひとりに自分がまとめた書類を配っていた。

こういった会議というものに慣れていないのだろうか？

ディーリアとメイディーはそわそわしながらあたりを見回していた。

いつもは緊張感のかけらもなく、ふざけて遊んでいるような連中が、真面目に会議をしているのを見ると、別人のように見えるらしい。

張り詰めた空気の中、それに溶け込むくらいに澄んだ声でシェールが会議の司会を行っている。

「相手を格下と甘く見ないように。ハングリー精神に飲み込まれるわよ」

シェールは、作戦を話し出した。

自分達のエスカッションは相手にばれている。相手には、戦う場所を選ぶ権利がある。

そして、相手は奇襲をしてきた。次の戦いだって奇襲で攻めてくるだろう。警戒は怠らないようにしなければならない。

「それに、アサシンの毒には注意ね」

リーシアが言う。

アサシンが独特の毒薬の製法を持っているのはリーシアも知っていた。

「薬の類は、私だって作れるから、それで対処をするわ。作っておくから出発前にでも渡すわね」

そして、シェールに話を戻す。

「前と同じ形で奇襲をしてくるのなら、対策を考えているわ」
そして、シェールはその作戦を話し出す。

作戦会議が終わった後、ラタはシェールをリビングに残した。

意味のない、形式的な挨拶などはなしに、ラタは単刀直入にシェールに向けて聞いてきた。

「スラム街の事をどう思いますか？ 私はスラム街が憎くてなりません。できることなら、全てを取り壊してしまいたいと思っています。王になったら、そうしようとしていました」

それは、上流階級の人間の本音であろう。

スラム街では犯罪が日常茶飯事である。そのスラム街からやってきた者が自分達の住んでいる市街で犯罪を犯す事もある。

犯罪を犯したものを追っていても、スラム街に入れば兵士であろうと無力である。

街ぐるみで犯罪を隠される。犯人はどこかの人間がかくまう。しかも率先してである。

人を探そうなんてしても、誰も口をつぐんでしまい、犯人になどたどりつけない。

「私はどんな所か知らないから……」

「『あんな場所だが、人々はたくましく生きている』等々、スラム街を美化しようとする言葉をよく聞きます。人はあの場所を『実はすばらしい場所』なのだと思いますね」

シェールは目を見張った。ラタに対する反感を感じる視線だ。それに気づいているラタであるが、それでも、ラタは言うのをやめなかった。

「そんなものは幻想です。真実だと思うのなら一年くらいあの場所に住んでみるといいです。それでも同じことが言えたら褒めてあげますよ」

「そんな、憎まれ口を言いたかったの？」

ラタがシェールに言った言葉は、完全に金持ちの傲慢に聞き取れる言葉だ。

スラム街に住んでいるからといっても、そこまで言われるいわれはないはずだ。

「昔は私もそう思っていました。スラム街に住む女の子と友達にな

れるんじゃないかと、馬鹿な事を考えていたんです」

ラタは昔の話をした。靴をプレゼントしようとした女の子は強盗に豹変した。

あの時の自分は甘かった。ロクでも無いことを夢想していたのだと、今では思っているのだと。

「その子は今、敵のリーダーとなっています。そのリーダーは私に戦わせてくれませんか？」

ラタがそこまで言う。シエールは考え出した。

因縁のある相手という事だ。

因縁のある敵との戦いは、シエール自身も経験がある。

一緒に戦おうとした当一を、後ろに下がらせてシエールはリーシアとの決戦をしたのだ。

「それだけ言えばいいのよ」

『了解したわ。そうするように考えてあげる』シエールはそう言つて、席を立った。

「あなたも、甘い事を考えないようにしてください」

部屋から出て行こうとするシエールの背中に、ラタは最後にそう声をかけた。

当一は、今日はウォーキングシューズを履いてレイグネンにやってきた。

赤い世界の足元は砂地であり、それを踏みしめるために作られている靴だと、昨日の革靴よりも、何倍も歩きやすかった。

シエールは、先頭を歩き、周囲の事を警戒している。

ラタも、リーシアも、無駄口などはきかずに周囲を警戒しながら歩いていた。

この張り詰めた空気についていけないのが、ディーリアとメイディーだ。

昨日の会議や、今の皆のような緊張感を持つ事に慣れていないのだろう。動きが硬くなっていた。

リーシアは、二人の様子を振り返ってわらいかけた。
「大丈夫よ。気を楽しんできてくれるといいわ」
そう言うと、再び元の様子に戻って先へと歩いていく。

絶対攻撃 2

ガケの最上段は、よく風が通る場所だ。

青い空が思いっきり見渡すことができ、この高さから見ると岩ばかりの不毛の大地に見えるこの場所にも、小さな木などが生えており、生命の生きる場所であるという事がうかがえる。

「目標発見……」

冷たく、小さく、それであるがよく通る声がガケの上に立つエイディエル組の面々の耳に届く。

それはアイシャの声だった。双眼鏡を持ってシェール達の事を確認している。

「二人増えている。だが隊列を見ると、二人とも初心者だ」

シェールとラタとリーシアが前に出て、その後ろを二人が歩き、最後尾にはノエリアがいる。

これは、この二人を守るための陣形であるのがわかった。

アイシャは双眼鏡をローブの中にしまい、全員の事を見渡した。

いびつな形の木の花の枝の端と端に糸を張ってつなげたものを持っている。それは糸の張力に引かれてアーチ状にになっていた。

面々はガケの淵に並び、懷から取り出した木の棒を糸につがえ、力をかけてひきしぼる。

それは、彼女らの手製の『弓』であった。やじりをシェール達に向け、エイディエル組の面々がアイシャの号令を待っている。

「撃て」

アイシャの冷たい声に反応し、九人の仲間達が矢を放つ。

矢が飛んできたのに、シェール達はすぐに反応をした。

ノエリアは全員にフェイスメールをかける。

リーシアはメイディーとディリアの前に立ちふさがった。

「よく見ていればよけられる数よ」

敵の数は、たかだか九人だ。バラバラに打ち込んでくる矢は慎重になれば避けれる。

「避ける必要ありませんわ」

ノエリアはそう言って、わざと、矢の軌道に立った。

コンッ！

矢はフェイスメールにはばまれて、間抜けな音をたてて地面に転がった。

次々に打ち込まれてくる矢は、何の効果もない。だが、リーシアはそれでも余裕

見せることなく慎重に、打ち込まれてくる矢を見張った。

リーシアに向けて打ち込まれてきた矢は、フェイスメールを貫通し、リーシアの頬すれすれを通った。

フェイスメールは殻を破らて、亀裂を全体に走らせた後に、粉々になって消えていく。

「相手はフェイスメールを破る、何かの『力』を持っているわ！逃げないと危険よ！」

シエールは聞くと、指示を出した。

「てはず通りに動いて！」

それを聞くと、シエール達はガケを滑り降りて逃げていってしま

う。

「逃がすな！ 追うんだ！」

今の状況は、絶対的有利である。ここでたたみかけようと考え、追っていく。

エイディエルを先頭に、次々に降りていった。

エイディエル達は、シエール達を追ってガケを駆け下りていった。ガケを滑り降りて下の段に降りるエイディエル達の視界には、下の段からも、また飛び降りていくシエール達が映る。

『どこまで降りる気だ……？』

この崖の一番の下層は、水が流れている場所になる。小さな小川程度の水が流れているだけであるが、足元はぬかるんでいるためまともに動きがとれなくなる。高所から攻撃を受けている今の状況で、そこに立つのは自殺行為だ。

だが、一人ガケに残っている人影がいた。その人影は紫色の髪をしている。ローブを着た姿の彼女は、エイディエル達を紫色の瞳を鋭く細めて見上げていた。

アースウォール

アースウォールはエイディエル達の滑る崖から突き出された。すべり台のようになめらかに作られたアースウォールは、長く伸びて、エイディエル達の立つべき段を覆ってしまった。

このまま滑っていくと、止まることができずにシエール達に一段まで降りていってしまう。

「下に降りるな！ しがみつけ！」

仲間達にそう指示を出すエイディエルだが、止まることができない者などいない。リーシアの作ったすべり台に乗せられて、下の段まで落ちてしまった。

斧が壁にたたきつけられる音をリーシアは聞いていた。姿を見る前に、その音の主に声をかける。

「よく、しがみつけたわね」

エイディエルは、斧を壁に突き立ててそれにぶら下がっていた。斧をつたってガケから登ってきたエイディエルの姿を確認したリーシアは、マジックワンドをローブの中にしまった。

「ラタから少し話を聞いたわ。かなり大胆な事を考えているわね」武器をしまった相手に向けて攻撃をする気にはなれないエイディエル。斧を降ろしてリーシアの言葉に答えた。

「私の昔からの願いだからな」

スラム街を取り潰す。

その考えは、リーシアから見れば無茶無茶だ。いくら王になったところで、実現不可能であるとリーシアは考えている。

だがそれは置いておき、リーシアは言い出す。

「そういえばね、この戦いにはお互いに挨拶代わりに『名乗り』をするっていうルールがあるの」

エイディエルは、名乗りならばすでにしている。

時間稼ぎのための演技であつたのであるが、その名乗りでお互いに全力で戦おうと、宣言をしたのだ。

だが、リーシアが言うにはそれだけではいけないらしい。

「ああいうのはちよつと違っていてね。『自分はどのような王になろうとしているか?』っていうのを相手に向けて宣言をするのよ」シェールは騎士王になろうとしている。やさしく、強く、それについて仲間を自分と平等に扱う、王になろうとしているのだ。

「遅くなっちゃったけど、下に降りたら『名乗り』をしてちょうだい。それがこの戦いのルールだから」

そう言うと、リーシアはガケを滑り降りていった。

ガケを降りながら上を見上げると、エイディエルが自分を追って降りてきていた。

リーシアは顔に不敵な笑みを浮かべてそれを見上げたのだ。

この戦いに『名乗り』をしなければならぬなどというルールはない。

リーシアは、ラタから聞いた、エイディエルが王になる理由をシェールに聞かせたいと思ったからそう言ったのだ。

スラム街で育った人間自身が、スラム街を掃き溜めと呼び自分の故郷をつぶそうとする事を聞き、シェールはどう思っているかという結論をつけるだろうか?

それを知りたいためについた嘘であつた。

「綺麗事だけじゃないのよ。王様っていうのは」

リーシアは、シェールに試練を与えるつもりである。彼女の輝かしい魂が汚泥のような汚れに触れたら、どうなるのかを見ようとしているのである。

リーシアが降りてくるのに続き、エイディエルも降りてきた。

リーシア、エイディエルは自分達の陣営に降り立ち、お互いに睨みあう形になった。

足元には細い水の筋のような川が数本流れており、砂が水でしけって足元の悪い場所である。

谷の底にあるため、太陽の光が届かない、影になっている場所である。

その中でもよく映えて見えるシェールの白髪とエイディエルの金髪。

エイディエルは腰に戦斧を立て、皆の中から一步進み出ていった。「私は浄化する王になろうと思っている」

エイディエルに習って剣をしまい、皆から一步前に出てエイディエルの名乗りを聞いた。

それを見て、リーシアは一人で小さく口の端を吊り上げる。

「私はスラム街で、人間の醜さをいやというほど見てきた。この世界の混沌を知り尽くしている。この世界から混沌をなくす。この世界をきれいなものにする。王になったらそうするつもりだ」

「……」

無言のシェール。

エイディエルの言葉を聞くと、無言で目を伏せ、シェールは聞いた。何か、手探りで相手の事を調べるために言ったような口調であった。

「あなた達の故郷。スラム街はどうするつもりなの？」

エイディエルは即答をする。

「あんなものは取り潰す。あんなものは世界にあってはいけない」

再び、シェールは目を伏せる。

「ラタ……どういうつもり？」

これは、ラタがシェールに向けて言った言葉と同じ言葉である。

「……想像の通りです……」

ラタは小さくそう言った。

シェールは、奉仕活動の時、ラタがエイディエルと同じ班になったのを思い出す。この言葉はラタの、シェールに対する問いかけであつたのだ。

ラタは、エイディエルの言葉を聞いて、シェールと同じ感想を持った。

シェールだったらこの言葉をどう思うだろうか？ 王になってまで故郷を潰そうとするのがラタには理解ができない。

シェールに同じことを言って、彼女の反応からシェールの意見を探ろうとしたのだ。

絶対攻撃 3

ラタが言えば、シェールには傲慢に聞こえた。だが、エイディエルが言えばその言葉の意味は、一気に変わってくる。

これが本当のスラム街の人間の声。

自分達は汚れていると自覚をしていながら、だからといって生き方を変えることができない。自分達はいつまでも、この腐った世界で生きていくしかないのだ。

そのスラム街の中で、それをよしとしなかったのがエイディエルだ。自分で自分の故郷を嫌い、それを壊す事を望む姿は、シェールにはわけのわからないものにしか見えない。

「シェール。スターク師匠を殺した連中は今、どうなっているか知りたくはない？」

ここぞとばかりにリーシアは言い出した。

昔、魔法の鏡を使って覗いたことだ。

スタークは決闘を理由に呼び出され、出向いていくと、敵が大量の手下を従えていた。

その手下達の最後を、リーシアは見ている。スタークを殺したゼルとヴィッツ。その片割れのヴィッツに、金をせびり続けて、最後には殺されたこと。

そいつらも、スラム街で生まれて、スラム街で生きてきたチンピラ連中だ。

「何で、今その話をするの？」

恨みがましく言ったシェールだが、わざとらしくニコリと笑って返したリーシアが、逆に神経を逆なでするくらいに、穏やかな声で言った。

「今がチャンスだと思ったからよ。スラム街の問題は王になったら必ず直面する問題だからね」

そして、この前、リーシアがシェールに向けて言った言葉もある。

「自分の手を汚す覚悟も無い人間が、王の器といえるのかしら？」
リーシアはその言葉を、今反芻した。

自分の手を汚すのを恐れて、スラム街を野放しにするか？ それとも、自分の手を汚してでも、スラム街の問題を解決するか？

「今、答えを出さなきゃならないの？」

「今出さなきゃ、永遠にこの事については考えないんじゃないかしら？」

シエールとリーシアがそう言い合う。

エイディエルは、シエールを見た。

『そんな事は考えたくない』

そう考えているのがエイディエルにはわかる。

それはそうである。王になる事は考えていても、それに伴って受ける事になる問題や苦しみまでも受け入れてはいない。

憧れだけで王の座に座ろうと考えているから、こういう具体的な問題を突きつけられると何も答えられない。

「甘いんだよ」

その点においては、エイディエルは覚悟を先に決めている。エイディエルは、この程度の問題を突きつけられただけで動揺を見せるシエールの事を心のそこから笑って言った。

あたり前の事であるが、何かの地位を手に入れようとがんばったとする。

だが、苦勞を乗り越えて初めてその地位を手に入れたとしても、手に入れた瞬間が始まりであるのだ。

地位を手に入れ、それからその地位に見合う自分になる事からはじめなければならない。

その点では、同じ王を目指して戦っているシエールと比べると。エイディエルの方は先に、苦しみに立ち向かう覚悟ができていえるだろう。

「お前にやる事ができないなら私が代わってやる」

迷いや葛藤を抱えた、弱いシエールの姿を見たエイディエルは、

シエールの事を小ばかにしているのを隠さずに、笑って見せた。

エイディエルが斧をかまえる。それに合わせてシエール達も、武器をかまえた。

「最初は、お前から仕留める」

エイディエルは、斧を突き出して、ラタにその切っ先を向けた。宣言をした後、斧を下段に落としてラタに向けて駆け出す。

自分の過去を無理払うために、エイディエルはまっすぐにラタに向かっていった。ラタは剣をかまえたまま、エイディエルの動きを見据える。

エイディエルは、大きく斧を振り上げた。そして、飛び上がりラタに向けて斧を叩き落す。

「うおおおおおおおおおおお！」

大きく咆哮をあげ、思いっきりラタに斧を振り下ろした。

ラタは、それを横に飛んでかわし、地面に降り立ったエイディエルの脳天にたたきつけるために剣を振り上げた。

「なぜよけた……？」

「どうして……？」

チェリンとアイシャが口々に、驚いた声で言った。

『なんで効かないんだ』『綺麗に避けたぞ……』

チェリンとアイシャの後ろから、他のエイディエル組の面々の声がささやかれる。ラタがエイディエルの攻撃をかわした事がそんなに衝撃的な事なようだ。

エイディエルはラタの剣撃の下をくぐってラタの攻撃をよける。

ラタの剣は、目標を失ってぬかるんだ地面にたたきつけられた。

湿った砂がこびりついた剣を、地面から抜くラタは、少しだけ眉根を寄せてエイディエル達を見た。

「あんな大降り、よけて当然です」

そのとおりである。素早いわけでなければ正確なわけでもない。

スキだらけの飛び斬りだ。

それなのに、エイディエル達の間では、ピリピリとした空気がまとわれ始めた。

「効かなかったくらいでうろたえるな！ 分かってない事の方が多いんだ！」

不安になり始めた仲間達に、エイディエルは激を入れる。

ラタを始めとして、シェール達にはまったく意味の分からないやり取りである。

「もう一度だ！ 今度は決めてやる！」

エイディエルは仲間達に向けて、大声で宣言を上げた。

リーシアが前に出て行く。

「あちらが何かをしようとしているのは確かよ。さっきは失敗したみたいだけど」

リーシアは、杖術のかまえをしながら、マジックワンドをエイディエルのに向けた。

「ちょっと試してみるわ」

ラタがそれを見ている。

「魔術師が前衛に立つのは危険です」

ラタが言うのに聞かないリーシアは、魔法を使った。

ファイヤーボルト

空から炎が降ってきて、エイディエルを襲う。

ダン！ ダン！ ダン！

アイシャをファイヤーボルトで打ち付けたような硬い音がする。直撃を受けたはずなのだが、ダメージを受けた様子が見えないエイディエルは、斧をかまえなおした。

「私に続け！」

そう言い、仲間を率いてシェール達に向かっていった。

戦局が一変したのはすぐだった。

エイディエルは、リーシアに狙いを定めて斧を振り上げた。そして、性懲りもなく飛び上がったのだ。

「うおおおおおおおお！」

大声で叫ぶエイディエル。その動きをしっかりと捉えるリーシアであったが、どうも様子がおかしい。

体が固まっているように見える。目が大きく開かれて体中が強張る。まるで、電流に耐えているような様子で、震えながらエイディエルの攻撃に相対していたのだ。

ラタがリーシアの事をけり飛ばす。そして、エイディエルの攻撃が地面にたたきつけられた。

「何をしているのです！」

ラタが言う、起き上がったリーシアが言う。

「金縛りにでもあったみたい……体中が動かなくなったわ」

これが、エイディエルの攻撃の成功であったようだ。

相手が動けなくなり、無防備に相手に強烈な一撃をたたきつける。

「絶対攻撃だ」

エイディエルが言う。それがこの攻撃の名前であるらしい。

絶対攻撃 4

ラタがエイディエルに向けて走っていった。

剣を下段にかまえ、頭から突っ込んでいくような姿勢である。

エイディエルはそれを正面から迎え撃った。左足を前に出す姿勢で斧を後ろに下げる。

ラタはエイディエルの左側に回りこみ、足を地面の上で踏ん張らせてそこに止まる。

エイディエルのかまえでは、左側が無防備になるのだ。

戦斧はすばやく振り回せるような武器ではない。だから、いつでも振り出せるような姿勢でかまえる必要がある。

エイディエルの場合体を横に向けて、腰のひねりを使って斧を振り出せるようにして、斧の切っ先を後ろに向けているのだ。

このかまえの場合、エイディエルから見て左側が、まったくの無防備になってしまうのである。

ラタは、剣を振り上げ、狙いを定めた後、エイディエルに向けて剣を振り下ろす。

リーシアは、目標に向けて魔法を放つ。

フアイヤーボルト

また、体を丸めてマントで覆い、攻撃を受け止めるアイシャ。

ダン！ ダン！ ダン！

硬い音がする。

攻撃をやり過ぎたアイシャは、マントから顔を出す。だが、す

ぐに引っ込めた。

ダン！　ダン！　ダン！

またも、ファイヤーボルトがアイシャを襲ったのだ。

「まだまだ終わりじゃないわ」

リーシアが言うと、またファイヤーボルトがアイシャに向けて打ち下ろされた。

ダン！　ダン！　ダン！

「ゴリ押しとは頭の悪い方法だ」

マントを被ったままのアイシャは、目を出しながらリーシアに向けて言う。

「そんな見えすいた挑発をしたって、やめてあげないわよ」

リーシアが言うと、またもファイヤーボルトが打ち下ろされた。

『チェリン……いまのうちだ』

アイシャはチェリンに後ろ手で合図を送った。

『本当にやるの？　無理だと思うよ』

チェリンは、こんな事をやっても、成功なんかしないと思う。だが、アイシャはそれをただの弱気と受け取ったようだ。

「チェリン。弱音は許さない……」

「……がんばる」

アイシャがマントの中でビンの蓋を開けた。

マントで魔法を防いでいるとはいえど、ダメージがないわけではない。

言うなれば簀巻きにされて殴られているような感覚だ。

直接体の中に、重い衝撃がたたきつけられて来るようで、どんどん潰されていくような感覚を感じ、ジワリジワリと体力が削られて

いく。

起死回生になると思われるビンの中に入っている『デッドリーポイズン』の一種を、ファイヤーボルトの合間にリーシアに投げつけた。

リーシアの足元に投げつけられたビンの中身は零れて地面に落ちると一気に気化を始めた。

リーシアが匂いを嗅ぐと、口の中の感覚が薄くなって舌がしびれてくる。

『沈黙』の効果を持つ薬である。

リーシアは、ローブの中からビンを取り出し、その中身を口に含んだ。

ビンの中の薬品が今でも気化を続けて匂いを放っているの、そこから数歩だけ横に歩いて遠ざかる。

それだけで口の中の痺れが消えて、舌の感覚が戻ってくる。

リーシアは薬を吐き出すと、またファイヤーボルトの連発を続けた。

アイシャがビンをリーシアに投げつけたのを見て、チェリンは魔法の詠唱を始めていた。

チェリンの杖が赤く光った。杖を空高くかかげ、意識を集中する。空を切り抜くような赤い輪がチェリンの上空に上がり、輪の中に複雑な魔方陣が作られていく。

チェリンの目も赤く染まっていき、大魔法が完成された。

フレイムクラーケン

ダイオウイカの触手のような炎の帯がいくつもそこから発せられるはずであった。だが、魔方陣が、引き伸ばされたゴムがちぎれるようにして縮んでいき、消えてしまった。

メルトスペル

リーシアが発した魔法がフレイムクラークを打ち消したのだ。

リーシアが言う。

「そんな大降りが当たるわけがないでしょう」

いくら威力が高くても、詠唱時間の長い大魔法が簡単に成功する物ではない。

続いてリーシアは魔法を放つ。

ファイヤーボルト

チェリンも知っている低級の魔法をリーシアは使った。炎の矢を相手に向けて撃つ魔法である。

リーシアの魔法がチェリンに襲い掛かる。濃い密度であるのが分かる青い色の炎。それが数え切れないほどの数チェリンに向かってくる。チェリンの顔は一瞬で青ざめた。

ダン！　ダン！　ダン！

いくつもの爆発音が連続で聞こえる。

当一はチェリンがこの爆発の中で生きているか心配になるほどだった。チェリンはリーシアの魔法で倒れていた。满身創痕であるが息はあるという感じで、倒れながらも細い呼吸を繰り返している。

デイーリアとメイディーは、二人で剣撃を叩き付け合っているラタとエイディエルの様子を、エイディエル組の向かい側から見据えていた。

エイディエルの援護をしようとして狙っているエイディエル組の中の一人が、進み出ていき、ラタの背中に飛び掛った。

だが、途中でメイディーが相手にタックルを仕掛けた。

空中で体当たりを食らって大きく飛ばされると、相手はすぐに起き上がる。

起き上がったところにディーリアが剣を叩きつけた。それを、辛くも受け止める。体だけを起き上がらせた不安定な姿勢でディーリアの剣を止めている相手だが、その後ろにメイディーが立っている。メイディーはこのチャンスを見逃さず、相手の背中を切りつけた。立っている敵であったら、足元を切りつけられる形に振った攻撃だ。

ディーリアとメイディーは、相手を倒したのを確認すると、ラタとエイディエルを挟んで、お互いににらみ合う形の、元の体制に戻っていった。

「出て来い！ もう無理だ！」

エイディエルは、仲間が一人倒されるのを横目で見た。

悔しそうにして歯をかみ締めたエイディエルは、誰かに何かを伝えるようにしてそう叫んだ。

赤い岩の壁の上の方で、光っているのを、シェールは見た。それは、ジェズルがエスカッションになる瞬間に放たれる光である。

「当一！ あんたも変身しときなさい！」

シェールが言うと、当一はドラゴンオブソードマウンテンに姿を変える。

そして、腹ばいの姿勢のドラゴンオブソードマウンテンは。エイディエルのエスカッションがいるであろうと思われる、谷の上の方を、にらみ上げた。

豹は肉食動物の中では小柄である。

ライオンの体重は200kg。チーターの体重は90kg。豹は50kgと、大型犬ほどの大きさしかない。

エスカッションとなっても、ドラゴンオブソードマウンテンと比

べても小さい。はらばいになり、通路いっぱいスペースを使つて窮屈そうにして立つドラゴンオブソードマウンテンと比べれば、その方がこの状況には適しているだろう。

マッドパンサー。体が泥で作られているような姿をしている豹は、唸り声をあげた。

口を大きく開け、鋭いナイフの形をした牙は、よどんだ色をしていながらも太陽の光を反射してギラリと輝く。

牙の先からボタボタとドロがしたたり落ちていく。

一歩歩くごとにベチャリ…ベチャリ…と音をたて、ドロでできた顔の中からのぞく、鋭い目がドラゴンオブソードマウンテンをにらみつけた。

マッドパンサーは体を縮めると、飛び上がった。一つ上の段にまで上がり、ガケの上から下にいるドラゴンオブソードマウンテンを見下ろした。

マッドパンサーの形がグニヤリとゆがむ。ガケの上から滑り降り、形を失ったマッドパンサーは泥の雪崩のようにして勢いよくガケを滑り落ちていく。

津波の姿になったマッドパンサーはドラゴンオブソードマウンテンを飲み込もうとした。

飲み込む寸前で一気に元の姿に戻ったマッドパンサーは、それから大きくアゴを開き、ドラゴンオブソードマウンテンの首元にぐらいついた。

慣性に従い、体が投げ出されるようにして宙を飛ぶが、牙一つでドラゴンオブソードマウンテンに噛り付いてとどまった。

そこでドラゴンオブソードマウンテンは、歯を食いしばって暴れる事なく耐える。

ドラゴンオブソードマウンテンの首元にぐらいついたままのマッドパンサーに向け、炎の矢がいくつも打ち込まれた。

ドオン！ ドオン！ ドオン！

マッドパンサーはそれでもまだドラゴンオブソードマウンテンの上から離れようとしなかった。そこにまた炎の矢が打ち込まれる。

絶対攻撃 5

リーシアは、チェリンとアイシャに背を向けている。

そのまま、二人の事を警戒する事のないリーシアは、もう一度ファイヤーボルトをマッドパンサーに向けて打ち込んだ。

「なめてる……」

アイシャは舌打ちをしながら言った。

自分に、無防備に背中をさらすリーシアに、頭から突っ込むような形でリーシアに突貫をしていくアイシャ。それに合わせて、チェリンはファイヤーボルトをリーシアに向けて打ち出した。

アイシャとチェリンの二人の力を合わせた攻撃である。リーシアは、自分に向かってくるファイヤーボルトを見て、魔法を使った。

オウターマーク

オウター（修正）マーク（対象）。その名の通りの効果を持つ魔法は、リーシアを目標にしている動きから、弧を描いてアイシャに目標を変えていった。

アイシャは、それを見ると歯をかみ締めてマントで体を覆った。

ダン！ ダン！ ダン！

アイシャは大きく息を吐く。体の中に溜まっている悪いものを吐き出すような深いため息だった。

『ダメージが溜まっているわね……』

アイシャの様子を見たリーシアは、口元を歪めて笑った。

『だけど……』

やはり、チェリンの魔法には何か秘密がある。

オウターマークは一応成功した。だが、何かの強力な抵抗を感じ

た。リーシアは自分の持っている杖にひびが入っているのを見つけてる。

『今回の戦いが終わったら取り替えよう』

ひびが少し入っているだけなら、まだ十分に使えるはずだ。取り替えるのは後でいい。

チェリンの力の秘密を探ってやろうと考えながら、アイシャとチェリンの方を向いた。

二度目のファイヤーボルトが放たれたとき、マッドパンサーはドラゴンオブソードマウンテンの背中から飛び退いていた。

ファイヤーボルトは、ドラゴンオブソードマウンテンの背中に全て打ち込まれた。

歯を食いしばって耐えるドラゴンオブソードマウンテン。

耐え切ると、ドラゴンオブソードマウンテンは、首を上げて

「グルルルルル……フウ……」

腹の底から、苦しそうに空気を吐き出したドラゴンオブソードマウンテンは、マッドパンサーをにらみすぎる。

マッドパンサーは、体を縮めた後飛び上がった。

ガケの上に足を下ろしたマッドパンサーは、ベチャリベチャリと足音をたてながら向きを変えて崖の淵に立つ。

ドラゴンオブソードマウンテンは、ガケの下で地に伏せているはずである。

高台に立ち、いつでもドラゴンオブソードマウンテンの事を狙える位置についたマッドパンサー。

マッドパンサーは、また崖の上に立ってドラゴンオブソードマウンテンを、注意深く見下ろした。

ドラゴンオブソードマウンテンは、轟音を立てながらガケの底を這い進み、チェリンとアイシャを襲っているところであった。

『こっちは無視か！』

マッドパンサーに姿を変えたジェズルはそう思う。

自分がこの高台に逃げている間は、下ではドラゴンオブソードマウンテンが好きに暴れまわる事ができるのだ。

攻撃の届かない相手を眺めているよりも、攻撃の届く相手を襲ったほうがいい。そんな事は当たり前だ。

マッドパンサーは急いでガケから滑り降りていった。

『キエエエエエエエエエエッエ!』

巨大な奇声を上げたドラゴンオブソードマウンテンは、アイシャとチェリンに向けて轟音を立てながら向かっていった。

「あいつ……何やってる!」

アイシャは、ガケの上に立っているマッドパンサーを見て舌打ちをした。

自分の目前に迫っているドラゴンオブソードマウンテンを見たアイシャは飛び退こうとした。

だが、そこにリーシアの魔法がかけられる。

ヘビーウエポン

アイシャのマントの中にはいくつもの暗器が仕込まれている。リーシアの魔法で、それが全て反応をして、その重みで倒れてしまった。

「これで一人」

リーシアはニヤリと笑いながら言った。

相手の中で、ものになりそうな力を持っているのはアイシャとチェリンとエイディエルの三人だ。

この三人を倒してしまえば、勝ったも同然である。

ドラゴンオブソードマウンテンの、刀のように鋭い爪の伸びた手が、アイシャを襲っていく。

アースウォール

アイシャに向けて手が振り下ろされる直前に、岩の壁がドラゴンオブソードマウンテンの手を阻んだ。

「アイシャ！ そんなもの捨てて！」

チェリンが声をかけると、軽くなったマントをほうり捨てたアイシャが、チェリンの隣に立った。

『この機会は逃さない……』

ドラゴンオブソードマウンテンになった当一は、『これで決める』と、決意を固めて轟音をあげて進んでいった。

アイシャとチェリンを襲うために、トカゲのように波打ちながら湿った地面の上を走るドラゴンオブソードマウンテンだが。

そこに、ガケの上から滑り降りてきたマッドパンサーが食らいついていった。

シェールとディーリアとメイディーは、ラタとエイディエルが戦うのを相手と向かい合わせになって見守っていた。

「あの戦いに邪魔を入らせないで」

ディーリアとメイディーに向けてそう支持を出すシェール。睨みをきかせてエイディエルの仲間の動きを封じていた。

ラタとエイディエルの戦いは、エイディエルの周りを走り回って攻撃を続けるラタと防戦一方のエイディエルの戦いである。

上手く死角に回り込むラタに対して、体の向きを変えたり、攻撃をかわしたりしてしのいでいるエイディエル。

この勝負は、いずれラタに軍配が上がる。

このままであればそれは明らかな様子であった。

ラタの攻撃に対して、何もできないエイディエルは、焦りを感じながら考える。

『このままじゃ負ける……』

自分の命綱であった絶対攻撃は破られた。動きの上手い相手に、

自分は何もすることができない。

『これは決闘じゃない……』

エイディエルは、ラタとの戦闘をしているが、これは決められたことではないし、お互いに約束をしたことじゃない。

『私は勝たなきゃならない……』

自分には目標がある。

この戦いはその目標を達成するたもの戦いの『ひとつ』である。ラタとの私怨など、それから考えると小さなことではないか。

そこに考えがいきつくと、エイディエルの目にディーリアの姿が映った。

『ラタには効かないだけ、リーシアには効いたんだ……』

ラタの動きから目を離れたエイディエルは、ディーリアに向かっていった。

飛び上がり、大声で気合を上げる。

「うおおおおおおおおお！」

絶対攻撃による一撃。

思ったとおり、ディーリアには絶対攻撃は効いた。体が固まって動けなくなったディーリアは、エイディエルの斧の一撃を、肩に思いつきり受ける事になった。

血が飛び散り、ディーリアが目を見開いて倒れていく。

エイディエルの背中に剣がたたきつけられた。

「よくも余所見を……」

ラタが斬りつけたのである。背中に走る激痛で、エイディエルは気が遠くなったが、歯を食いしばって足に力を込める。

顔を上げたエイディエルは、目の前に見えるノエリアの事を眼光鋭くにらんだ。

斧をかまえたエイディエルは、まっすぐにノエリアに向かっていく。

幕間

ラタは、ヘンクツな鍛冶屋のところにやってきた。

その鍛冶屋は、金を受け取ると、黙って鉄を打ち始める。

掘っ立て小屋そのもののような家屋である。雑に土を塗られてデコボコになっていたり、土のつなぎに使われている藁などが突き出している。

鍛冶の道具は新品の新しくてきれいなものを使っているが、部屋の隅に使い終わった歪んだ器具が転がっており、ぐちゃぐちゃの部屋だ。

注文は無いのか？ サイズはどうするか？ それらの事務的な事しか聞いてこず、余計なことなどは一言も言わないのが、常であった。ラタも、特に話しかける事など無く、鍛冶屋が鉄を打つのを黙って眺めているだけである。

だが、その日は違った。

鉄を打つ鍛冶屋。それを見守るラタ。

そして、片目を失った使用人の男。まだ完治をしておらず、目の周りに包帯を巻いていた。

普段なら、まったく二人の事を気に留めない鍛冶屋は、ふと話しかけてきた。

「俺が武器を作るのは、二つの時だけだ」

ラタと使用人は返事をしないが、家事屋は話し続ける。

一つは、もちろん金を積まれたとき。

今のように、『金に糸目を付けないから、最高の武具を作ってほしい』という注文が金持ちからやって来た場合だ。

自分も人間である。無論、金には弱い。これは当然の事であると、鍛冶屋は言う。

「もう一つは、素質のある奴を見つけたときだ」

カンカンという鉄を打つ音が響く中、普段は無口であった鍛冶屋

は、その話を境に饒舌になっていく。

「あそこにあった斧がなくなっているのに気づいたか？」

『あそこ』と鍛冶屋は言うが、指を刺すわけでもそこに視線を向けるわけでもない。ラタが部屋の中を見回してみると、何かの武器を掛けていたのではないかという金具が取り付けられた場所が目に入った。

ラタが思い出してみると、そこには巨大な斧が飾ってあったはずである。

「最高の目をしたガキに会った。あいつなら、世界を変えられるかもしれない」

普段は無口な鍛冶屋が、ニヤリと笑った。

あの斧はその相手に渡したのだろう。

あなたには負けない

ノエリアに斧を向けるエイディエルは、飛び上がった。

「うおおおおおおおおお！」

すでに体が固まってしまっただけ動けないノエリアは、目を見開いたままエイディエルの事を見上げた。

ギリリと光を反射する斧を見て、ラタは苦々しくかを食いしばった。

ラタは、エイディエルに負けることのできない理由がいくつもある。

昔の因縁。鍛冶屋が彼女を認めたという嫉妬。どうしても、自分の手で彼女に勝たねばならないと、心の中に決めているのだ。

「あなたには負けない！」

ラタは剣を持ってエイディエルを追っていった。だが、間に合わない。このままではノエリアを助けることはできない。

自分はまたエイディエルに大切なものを奪われる。

ラタは、間に合わないと分かりながらも、走る足に力をこめていった。

「うおおおおおおお！」

エイディエルの斧が、ノエリアに襲い掛かる。

カンッ！

その斧はノエリアに届く前に阻まれる。

黒いゲートがノエリアの前に現れ、そこから伸びてきた剣が、ノエリアの頭上に突き出されてエイディエルの斧を止めた。

黒いゲートは、幕のようにして横向きに動き、剣を持った姿を少しずつあらわにしていった。

中身の入っていない鎧の姿をしているそれは、ノエリアを守るようにしてエイディエルに立ちふさがり、腰を落として盾と剣をかまえた。

白い塗装のされている、体に金の模様を入れられた豪華な鎧が、自分の意思を持って動いている。

アーマーガード

それが動く鎧の名前である。本物の生きている一人の戦士のように、しっかりとした存在感を持つその鎧を見て、シェールは言う。

「シール……それはラタのシールよ！」

ラタはエイディエルに向けて駆け出す。それに合わせて、アーマーガードは、エイディエルに向けて走っていった。

ラタがしていたように、エイディエルの左側に回りこんでいく。

『指示の出し方……そして、これからアーマーガードがどう動いてくれるか？ それに分かります』

いきなり出現したシールだが、ラタにはその使い方がはっきりと分かった。この鎧は自分の指示どおりに動く。

ラタは、アーマーガードと戦うエイディエルに向けて、切りかかっていった。

ドラゴンオブソードマウンテンは、背中に乗るマッドパンサー振り払おうとして体を思いつきり振る。

爪を突き立てて、ドラゴンオブソードマウンテンの背中にしがみつくマッドパンサーは、振り落とされまいと、ドラゴンオブソードマウンテンにしがみつく。

ならばと思いい、ドラゴンオブソードマウンテンは、前足で思いつきり地面を蹴る。

すると、体が起き上がり、それから体を垂直にまで持ち上げると、

ゆつくりと、後ろに向けて倒れていった。

マッドパンサーは、それでドラゴンオブソードマウンテンの背中から飛び退いていった。

ドラゴンオブソードマウンテンは、湿った土を巻き上げて、背中から倒れる。

すぐにドラゴンオブソードマウンテンは、体をひっくり返して体勢を立て直した。

ドラゴンオブソードマウンテンの背中にびっしりと生えた、青みがかかった無数の針が、砂を付けて赤茶色に汚れている。

あのまま背中に張り付いたままだったら、マッドパンサーはドラゴンオブソードマウンテンの体重に押しつぶされた上に、背中の針で穴だらけにされているところだっただろう。

体格面を考えれば、マッドパンサーはドラゴンオブソードマウンテンには勝てない。

だが、スピードを活かして一撃離脱を繰り返しても、相手を自由に暴れさせるだけである。

だから、マッドパンサーは真正面からドラゴンオブソードマウンテンに襲いかかる。

姿勢を低くして、ドラゴンオブソードマウンテンののど元に牙をつきたてようとして迫った。

体をぶつけて、相手の体を下から突き上げる。

ドラゴンオブソードマウンテンの頭が跳ね上がったところに、さけ出されたのど元にマッドパンサーが牙を伸ばした。

首を思いっきり振って、それから逃れるドラゴンオブソードマウンテン。

マッドパンサーの牙をかわしたドラゴンオブソードマウンテンは、マッドパンサーをギリギリとにらみつける。

マッドパンサーに向けて突進をしたドラゴンオブソードマウンテンは、地面スレスレから頭を振り上げてマッドパンサーの事をたたき上げた。

マッドパンサーは、それであお向けにたおされる。

ドラゴンオブソードマウンテンが倒れたマッドパンサーの喉に向けて、牙を付き立てようとする。

マッドパンサーはそれをスリりと抜けて、側面からドラゴンオブソードマウンテンをひっくり返そうとして迫った。

まるで、お互いがお互いの喉元に噛み付こうとして上下を交代しながら、もみ合って戦う、猛犬同士の戦いのようである。

ファイヤーボルトが、アーマーガードを襲う。

ダウン！ ダウン！ ダウン！

それで、アーマーガードはボロボロに崩れていった。

地面に散らばったアーマーガードの破片は、一つ一つが黒いゲートに飲み込まれて消えていった。

存在が、欠片も残らずに消えていったアーマーガードを見るラタだが、ファイヤーボルトを放った本人であるチェリンに向けて言う。

「それでは倒したことはありませんよ」

ラタには分かる。これでアーマーガードが死んだわけではない。

また呼び出せば、無傷の状態でまた姿を現すだろう。

チェリンは、それでもラタに向けて鋭くにらむ。

「もう一度呼び出せる？」

チェリンは臆する事なく返した。

ラタは無表情で黙って返す。

確かに、ラタにはもう一度呼び出せる気がしない。アーマーガードのことは、とりあえず置いておいたラタは、周囲を見回して、エイディエルに向けて剣の切っ先を向けた。

チェリンに向けて、ファイヤーボルトが打ち込まれた。

ダン！ ダン！ ダン！

「へえ……」

リーシアのファイヤーボルトは地面をえぐった。

リーシアは、アイシャが背中にナイフを突き出してくるのを気にせずに、チェリンに向けて目を見張った。

アイシャのナイフはフェイスメイルによってはばまれていく。

それで距離を取ったアイシャの様子を背中で感じながら、リーシアは言った。

「そんな使い方があるのね」

シルフウォーク

一瞬の間に瞬間移動をする魔法を使って、チェリンはファイヤーボルトをかわしたのだ。

目を細めたリーシアは、魔法の詠唱をする。

後ろに飛びのいたはずのアイシャの後ろに、リーシアが現れた。杖を振り上げていたリーシアが杖を振り下ろす。

アイシャは、とっさに前に飛んでかわす。

リーシアの事を警戒しながら、すり足で移動をしつつ、チェリンと寄り添いあった。

「どこでその魔法を覚えたの……？」

チェリンが聞く。リーシアは何でもない事のようにして答えた。

「こんな基礎魔法のラーニングなんて、できて当たり前よ」

この魔法は、今見て覚えたのだという。

リーシアは、魔法の杖で印を切り、次の魔法の準備を始めた。

あなたには負けない 2

残りが五人になったエイディエル組がにらみ合うのは、

ラタとシェールとノエリアとメイディー。その後ろでエイディエルとチェリンとアイシャが、リーシア一人とにらみ合っている。

そして、リーシアの背後で、ドラゴンオブソードマウンテンとマッドパンサーが睨み合っている。

狭い通路で混戦をしている二組の位置関係である。

両脇は、高い壁に囲まれており、幅は人が数人並べる程度。回り込んで相手の後ろを取ろうと考えるのは不可能だ。

シェールは周りを見た。

ラタもノエリアも五体満足でダメージもない。ディーアは、傷を押さえながら壁に寄りかかって待機しており、メイディーはそれを介抱している。後ろには、相手の主力の三人が、リーシアと睨み合っている。

『目の前にいる雑兵を倒してから、リーシアと私たちが挟み撃ちをすればいい……』

リーシア一人で敵の主力を二人も押さえ込んでくれたのが、勝負を自分たちの有利に進めた。

今は、挟み撃ちにするために絶好の場所にいてくれている。

今回の戦闘の、一番の功労者はリーシアであろう。

「前の五人を殲滅してから、後ろの三人を倒すわ。いいわね」

自分の周囲を固める仲間たちにそう支持を出したシェールは、ジリジリと前に向けて進んでいく。

エイディエルは、周りを見る。

自分の仲間は一人やられている。敵は一人倒しており、これだけ見れば勝負は拮抗しているように見える。

だが、敵は倒れた仲間の介抱に戦力を割く余裕がある。

自分達以外の仲間の實力は、あまりアテにならないという事実もあり、それは、敵にすでに見破られている。

敵は、挟み撃ちがいつでもできる状態にあるのだ。

『どうすればいい……？』

どうすればいい？ 考えるエイディエル。

この戦いは、ジェズルが倒された瞬間に負けとなる。相手のジェズルを倒すために戦いを挑んでいるのだし、この戦いの勝利条件は、それのはずだ。

逆に言うと、敗北条件はマッドパンサーが倒される事である。

ドラゴンオブソードマウンテンとマッドパンサーの戦いは、お互いに拮抗しており、いますぐに倒されそうな様子ではない。

全員を、マッドパンサーにしがみつかせて、ここから逃げる。

それが、今の状況で最高の判断ではないだろうか？

そのためには、目の前にいるリーシアが問題だ。

後ろに仲間たちもシェール達を挟んだ向こう側に居り、合流をするにはシェール達が障害となる。

「前の五人を殲滅してから、後ろの三人を倒すわ。いいわね」

シェールが言うのを、背中聞いたエイディエル。思わず背後を振り返り、仲間たちの助けに向かった。

エイディエルが一人で、仲間の救助のために走っていくのを、チェリンとアイシャは横目で見た。

ダメージを体に溜めており、エイディエルの行動に、すぐに反応をすることができなかったのだ。

「チェリン……」

服にぶら下げている二つのビンを持ち、一つをチェリンに渡したアイシャ。

「強めの興奮剤だ」

そう言うと、蓋を開けて、中身を一気に飲み干した。それに習って、チェリンもそれを飲み干す。

「うおおおおおおお！」

シェール達の背中に向けて、エイディエルが突進をしていくのを、チェリンが追っていった。

アイシャのつくった薬の効果は絶大であった。

痛みがやわらぎ、それと共に体の底から活力が沸いてくる。

頭もはつきりしてくる。これは、どう考えても麻薬の類である。

アイシャの作るデッドリーポイズンの一種である事は、チェリンもわかっていたが、この薬の力に何度も頼ってしまうのはいけない感じがする。

空から、リーシアの放ったファイヤーボルトが降り注いだ。

そこでチェリンは、エイディエルとアイシャの二人の手をつかみ、魔法を唱える。

シルフラン

三人の姿が突然消え、シェール達の前に三人が姿を出した。

シルフウォークの上位魔法である。この魔法は、自分だけでなく、周囲の人間も一緒にテレポートをする事ができるのだ。

リーシアのファイヤーボルトは地面をえぐり、硬い音をたてる。

これで、エイディエル組は、全員が合流をする。

皆の前に立ち、シェール達に向けて斧を向けるエイディエルに、アイシャの薬が渡された。

バーサクポーション

痛みを感じなくなり、筋力を一時的に強化をする劇薬だ。

それを飲んだエイディエルの目が、みるみる充血していき真っ赤に染まっていった。

「チェリン！今の魔法で何人飛ばせる？」

チェリンにはこの薬の効果は弱いらしく、目の色は変わらないま

チェリンの目が、エイディエルをまっすぐに受け止めながら、答える。

エイディエルは、それを聞き、シエール達を向いた。

どの世界でも指揮官になる人間が変わらずに言う当たり前の言葉だ。

だが、エイディエルは、その言葉をあたり一面に響くような大声で言った。

声を伝って、エイディエルの放つプレッシャーがシェール達にも伝わってきた。

ビリビリと手が震え、気を抜けば武器を取り落としてしまいそうな緊張を感じ、背筋に冷たいものが走っていく。

かけ声と一緒にになってエイディエルが突っ込んできた。

それに触発をされた他のメンバーもそれに呼応する。

彼女らエイディエル組の面々が、一つの津波のような迫力を持ちシエール達に向けて襲いかかっていた。

シエールはエイディエルに負けじと大声で言った。

自分達に向かつてくる 深い絆で結ばれた人の津波を押し返すよ
うなプレッシャーを放つ声。

腹の底に響くような重さを持った声だが、マジックロッドをかまえて、支援をかけるタイミングを計っているノエリアや、ディーリアの介抱をしているメイディーにとって、その重さはどこか心地よく感じられた。

そして、胸の中に熱いものがこみ上げてくる。

エイディエル達には負けられない。ここで、相手を倒してやる。心の底から湧き上がってくる高揚感を感じて、シェールがしてい

るのと同じようにして、深い戦意を込めた目をエイディエル達に向けたのだ。

エイディエルがラタに向けて斧を振り下ろした。それを、横に飛んでかわしたラタ。

だがそれに続いて、安物の曲刀をもったエイディエル組の仲間が、ラタに襲い掛かった。その攻撃を受け止めるラタだが、後ろから、レイピアが伸びてきたラタと剣を交えている相手の後ろから、突き出されたのだ。

ラタは、それで押し合いをやめて、相手から距離を取ると、相手はそのまま走り去っていつてしまった。

「しまった！ 奴らの狙いは逃げる事よ！」

シエールが言うが、すでに遅い、ディーリア達の背後を走りぬけ、自分達に背中を向けているドラゴンうぶソードマウンテンに飛び掛っていった。

「うおおおおおおお！」

エイディエルが斧をドラゴンオブソードマウンテンの背中にたたきつける。それに気づいて背中を見たドラゴンオブソードマウンテンに、次々とエイディエル組が思い思いに自分の武器を突き刺していた。

ゾウに蟻がたかるような様子であるが、それだけで効果は十分だ。後ろを向いたドラゴンオブソードマウンテンに、マッドパンサーがとびかかっていた。

ドラゴンオブソードマウンテンの頭を踏みつけて、ドラゴウオブソードマウンテンの背中に乗った後、エイディエル組の仲間達は、マッドパンサーの体をよじ登っていった。

あなたには負けない 3

全員が背中に乗ったのを確認すると、マッドパンサーはドラゴンオブソードマウンテンの背中を蹴って、まっすぐに逃げていった。マッドパンサーが、足で地面を蹴るたびに、ビチャビチャと音が鳴る。その音は、シェールの耳には遠くなっていく。

自分たちが、ドラゴンオブソードマウンテンの背中に乗って追ったとしても、足の速いマッドパンサーには追いつかないだろう。

「逃げられましたわ……」

ノエリアが、マジックロッドをしまった。

ラタは、追いつかないのを分かっているながらも、マッドパンサーを追っていく。

ピチャピチャと音を立てながら走るラタの背中を、シェールは苦々しい顔をして眺めていた。

自分は、マッドパンサーの首元にしがみつく。

その後ろに、仲間たちがそれぞれしがみついているのだ。

エイディエルは、姿が小さくなっていくラタ達を振り返る。

『いずれは乗り越えなければならぬ相手だ……』

自分の過去の汚点だ。自分にかけられる恨みを、自分は背負っていかなければならない。

何も夢を見ず、生きることには精一杯であった自分は、その事を悪いことだとは思わなかった。

だが、彼女のプレゼントを奪ったことだけは、今でも後悔をしている。

だが、それはそれだ。

謝ったところで許されることじゃないし、物を奪って生きてきた自分は、それを否定してしまうと、すべてが壊れてしまう。

奪った食い物で育ってきた自分の体を自分で否定することはでき

ない。

罪の積み重ねで作られた体を背負って生きていかなばならない。それに、そんな体をしているから、できる事もあるはずなのである。エイディエルが前を向きなおす。そうすると、赤い壁が両側に立つ通路が目映る。

いまだに出口を見えないが、この両側の壁が無くなったときが、自分の新しい出発である。

後ろを見る事をやめたエイディエルは、まっすぐに前を見据えた。

アースウォール

そのエイディエルの目に、壁の一部が突き出して作られた、突起が現れた。

その突起は、マッドパンサーのちょうど胴体の高さに作られていた。

それに反応ができないマッドパンサーは、もろにその突起にぶつかった。

頭からその突起にぶつかると、衝撃によって粘土細工のように無数の飛沫の姿になって飛び散り、大小無数のドロの塊の姿になり、周囲に飛び散った。

エイディエル達は、マッドパンサーの体から投げ出され、散り散りになって地面の上を転がった。

すぐに体勢を立て直すため、マッドパンサーの体は、お互いに寄り集まっていった。全部の塊が集合すると、すぐに元の豹の姿に戻る。

だが、その眼前にはドラゴンオブソードマウンテンの姿がある。ドラゴンオブソードマウンテンは、右の前足を大きく振り上げて、ギラつく爪を見せびらかしながら、それをマッドパンサーに向けて降ろしていった。

ゴウン！

轟音をあげて振り下ろされたドラゴンオブソードマウンテンの
一撃は、マッドパンサーを叩き伏した。

幕間

幼い頃のエイディエルは、金色の髪に、常にドロがついていた。市街地のような、綺麗に形の整えられたレンガとは違い、歪な形をしたレンガを組んで作ってある家。

それらがぼろぼろの姿をさらしながら並んでいる。

体を洗うときは、雨で作られた水溜りを使う。水も、雨水を貯めたものを使っている。

不衛生な環境で育っているものの、それが当たり前になってしまっているため、それを不思議に思うことはなかった。

そんな不衛生な生活を続けているので、病気を抱えている人間も多く、顔に痣があったり、腕に大きなできものができていたりする。だが、その頃のエイディエルはそれを不思議とは思っていなかった。

たまに、ここに訪れる毛並みのいい連中は貴族なのだという。人々から巻き上げた金を手に入れ、それで贅沢な生活をしているという。

ほとんどの貴族は、エイディエルの住んでいるスラム町の、鍛冶屋に用があってやってきているというのだ。

彼らが自分の事を見る目は、侮蔑をまったく隠さない目であった。自分の事を見下している。自分の事を馬鹿にして笑っている。

一言も口をきかなくても、鼻で笑っている姿が頭の中にちらついてくるのだ。そのくせ、表では礼儀正しく振舞っているのがさらに気に入らない。

何の根拠もなく、そんな事を考えていた。

だが、その考え方は、このスラム街で生きる人間には普通の考え方なのだ。

今の彼女は、道端に座っている。

自分の前を横切っている、時たまこの場所を通る馬車を恨めしうにして見上げていた。

その中から、男が降りてきた。

自分の前に、何かの包みを出すと、馬車の中にいる女の子のプレゼントなどと言ってきた。

そんなものを渡されても、素直に受け取る気になんてなれない。あいつらは、いつも表面上は取り繕う。

思ってもいないおべっかを使い、相手の事を直接バカにするような事はない。言葉の端々に嫌味を混ぜる、実に嫌らしい話し方をするのだ。

この箱の中身に何かがあるかもしれない。それとも、言葉そのものに、何かの嫌味が込められているのかもしれない。

エイディエルは、隠し持っていた石のナイフを使って、その男の事を切りつけた。

男が持っていた包みを奪うと、姿をくらましていく。

『これくらいやっとくくらいで丁度いい……』

その行動で、エイディエルが思ったのは、これで、貴族の鼻をあかしてやったという事だった。

エイディエルは、自分が寝起きしている、自分の住处と言える場所に来た。

屋根が壊れて、野ざらしと同じ状態になっている家屋の隅に、ロボロになった御座を敷いている。

これは、この街で生きる子供たちにとっては、平均的な寝起きをする場所である。

そこで、中に入っているものを開けたエイディエルは、中に靴が入っているのを見つけた。

エイディエルが始めて見るような可愛い赤い靴だ。

それを見て、目を輝かせたエイディエルは、靴を履こうとするが、自分の足が汚れているのが気になった。その靴を履くために、エイ

ディエルは、いつも自分が体を洗っている水場に向かっていった。水場というのは、石畳がヘコんで雨水が溜まる場所である。

底にはドロが沈んでおり、綺麗に見える透明な水が表面には張っているが、普通の人間から見たら、十分ドロ臭い匂いがする。

その水で、エイディエルは土で汚れた足を洗い始めた。

『もしかしたら、この靴は、本当にただのプレゼントなのかもしれない』

自分は、無駄に構えていただけかもしれない。

自分は、勝手に相手に悪意があると決めつけ、相手を傷つけてまで、この中身を奪った。

『謝ろう……』

自分は相手の事を切りつけた。恐らく、一生残る傷になってしまっているだろう。

謝っても償いきれない事をしてしまったのは分かっている。

エイディエルは、それでも、罪の意識が胸を焼いたのだ。

ドロが体の中に染み付いてしまっているかのように、黒ずんだ足が綺麗な肌色にならない。いくら洗っても綺麗にならない足を見たエイディエルは、靴を箱の中にした。

「エイディエル。何を持ってんだ？」

エイディエルの背中に声かけられた。

この辺りの住人を仕切っている男だ。

仕切っているとはいっても、実際にやっている事は住人に対する圧政である。

見かけたら、住人から物を取り上げ、気まぐれに税金などと言いがかりをつけて物や金などを取り上げる。

取り巻きの男も二人おり、この男たちもおこぼれにあずかっている。

これは弱肉強食の世界では当然の事だ。ピラミッドの頂点に立つ人間が下の者を貪って生きる。

このスラム街ではそれが特に顕著であった。

エイディエルは、プレゼントの箱を自分の胸に抱えた。

「見せてみるよ」

そう言うのと、取り巻きの男がエイディエルの事を押さえつけ、男は易々とエイディエルから、謝るときに返そうと思っていた、仲直りのための靴を奪い取ったのだ。

「こいつはそこそこ上物だな。俺がもらってやるよ」

『もらってやる』などと言い出す男。

「どうせ盗品だろう。お前の手元になけりゃならないもんでもあるめえ」

確かに盗品だ。そしてそれは、自分にそれをプレゼントをしてくれたあの女の子に返されるべきものである。

この男に取られていいものではない。

だが、エイディエルはその理不尽な申し出に抵抗ができなかった。その男は悠々として、エイディエルの大事なものを奪って去っていった。

住処に戻ったエイディエルは、ぼうっとして、自分の足を見つめた。

彼女からもらった靴には、自分の足はまったく似合っていない。

あれは、彼女に返されるべきものであったはずだ。

自分の罪を認め、どんな事を言われても甘んじて受け止める覚悟までつけていた。

だが、その気持ちは、この世界の摂理である、弱肉強食の名の下に、あの男に奪われてしまった。

自分が、お詫びを一つする自由さえも奪われたのは一体なぜだろうか？

「こんな世界があるから……」

エイディエルは、ふと聞いたことを思い出した。

自分は、王の座を巡る戦いに参加のできる年齢なのだという。貴族達は、こぞってその戦いで自分の子供を勝たせようとしているら

しい。

スラム街の中にある鍛冶屋に、頻繁に貴族の馬車が訪れているのは、それが原因らしいのだ。

「自分なら、この世界を変えられるかも……」

フラリと立ち上がったエイディエルは、『まずは武器』と考えて目的の場所に向けて歩いていった。

鍛冶屋の家から鉄を打つ音が聞こえてきた。それでも、夜の夜中であり、明かりなど付けずに作業をしている鍛冶屋は、自分などにまったく気づかないだろうと、エイディエルは高をくくっていた。隣にある建物と、まったく見た目も同じで変哲もない建物の中には、腕のいい鍛冶屋が作った武器がいくつも並んでいるのだ。

ナイフか何かがあればいい……

そう考えたエイディエルは、熱した鉄に槌を打ち込む姿を背にしながら、鍛冶屋がいる部屋の隣で武器の物色をはじめた。

「ほう……街の中でも有名なのか、俺の武器は」

あれから、エイディエルは鍛冶屋に見つかった。

部屋に道具を取りに来た鍛冶屋は、あっさりとエイディエルの事を見つけた。

だが、鍛冶屋はそれを見て、エイディエルに酒を勧めたのだ。

小さなお猪口に入っている酒をエイディエルに飲ませ、酒の苦さに顔をしかめるエイディエルを見て、鍛冶屋はニヤリと笑った。

今は、鉄を打っていた自分の部屋で、酒を飲みながら、エイディエルの話を聞いていた。

「面白い……お前に武器をやる」

鍛冶屋はおもむろにそう言うと、壁に立てかけてあった斧をエイディエルに渡した。

「こいつを使いこなせるようになってみな」

肩にまで、その武器に重量が伝わってくる。こんなものを、まだ

小さいエイディエルがふりまわせるわけがない。

だが、武器である事には変わらない。これは自分の最初の一步になる。

その武器を持ち帰る事に決めたエイディエルは、自分の事を嬉しそうに見つめる鍛冶屋の視線を背中に受けながら、そこを後にしていった。

エピソード 1

勝負に勝ったシェールが、敗者のエイディエルに向けて剣を突きつけている。跪くエイディエルの眼前に、シェールの剣の切っ先が突きつけられている。

冷たく鋭い、シェールの赤い瞳が、シェールを見上げるエイディエルの事を貫いた。

「エイディエル……」

シェールは冷たい声で宣告を始めた。

「あなたの負けよ。いますぐこの戦いから手を引きなさい」

奥歯を噛み締めるエイディエル。

エイディエルが周りを見回すと、仲間が倒れている。今まで苦楽を共にした仲間が痛々しい姿をさらしているのを見ると、さびしげに眉をゆがめた。

それを見て、シェールの剣を握る手が少し震える。

その手に、自分の手を被せるリーシア。じつ……とシェールの目を見つめる。エイディエルに視線を向けたままのシェールは、剣を強く握りなおした。それで、リーシアは、小さく微笑を浮かべてシェールの手を放す。

シェールは言う。

「宣言をしなさい。『この戦いにはもう手を出さない』と」

頭を下ろし、地面をじつ……と、見つめるエイディエル。震える唇が言葉を話そうとした……

体中が重い。いや……体に力が入らない。

感覚が鈍く、普段ならば力むくらいの力をこめて、初めて指一本が動くような感覚。これは、アイシャの使ったバーサクポーションの反動である。

体中の気が抜けて、動けなくなってしまうのだ。

うつすらと顔を上げると、シェールに剣を突きつけられているエイディエル姿が見える。

『私たちは負けたんだ……』

チェリンの脳裏にこうなる寸前の記憶が映し出される。リーシアがいつの間にか、自分たちの後ろに回りこんでいた。

ガケのひとつ上の段で、冷たい目をしたリーシアが魔法を唱えるのを確認すると、自分たちの行く手を阻む、アースウォールが現れたのだ。

『あの人は強かったなあ……』

アイシャと二人がかりでも倒せなかった。そして、最後に自分たちの壁になったのもリーシアだった。

『だけど……まだ何か私にできないかな……』

チェリンが、心の深い場所に持つ反骨心が震えだす。

『負けっぱなしは、どうしても嫌だよね……』

そう考えると、力の入らなかった指に力が戻ってきた。

『あと一回、魔法を使えば……』

大きく息を吸い込むと、胸の筋肉がピリピリと痛む。だが、やってやれない事はなさそうである。

シルフウォークを使ってシェールの背後に、チェリンが現れた。

そして、シェールにつかみかかる。

『早く逃げて!』

後ろから羽交い絞めにしたチェリンは叫びだす。

『誰か一人でも生き残ってくれればいい! エイディエルだけでも私達のために戦って!』

エイディエルは、チェリンがここになって大胆な行動に出たのに驚いた。チェリンがシェールを押さえつけるのを、呆然としながら見ていたエイディエルは、目を鋭くさせると、シェールに背を向けて走り出した。

「リーシア! 追いなさい!」

シェールが言うのに答えて、リーシアが動く。エイディエルを追うためにシルフウォークを使う。その際、チェリンを振りほどこうとしてもがいているシェールを横目で見た。

チェリンがエイディエルに向けて声をかけている。

「みんなの分もがんばって！」

姿が小さくなっていくエイディエル。その背中を見ながら、シェールは目元をゆがめた。

シルフウォークで姿を消したリーシアは、チェリンの背後に姿を現した。

マジックワンドでチェリンの事を殴って昏倒させる。

「あなたはまだ未熟よ。チェリンの想いに流されかかっているわ」
リーシアは、杖をしまう。そうすると、遠くにベヒーモスの姿が現れ、ものすごいスピードで木々をなぎ倒しながら遠くへと逃げていった。

「追いきれないわね」

そう言い、シェールは剣を鞘に納めて、倒れているエイディエル組の面々を見渡した。

シェールは、縄で縛られているエイディエル組の面々を自分の前に並べた。

六人の姿は、諦めが顔に出ている様子ばかり、一人違うのは、いまだに起き上がらないチェリンのみであろう。

ラタは剣を抜き、並ぶ六人の横に立ってシェールの事を見据える。

シェールは、その視線にピリピリとしたものを感じ、固唾を飲んだ。

「分かっている。いつまでも情には流されないわ」

シェールは視線だけをラタに向けてそう言う。ラタは、エイディエル組に視線を向け直した。

「あなたは汚れた街に住んでいたばかりに、その汚れは肌から染み込み、ついには心臓までも犯してしまった」

この言葉を聞く者達はどう思うだろうか？　ラタからこう聞いたとき、自分はラタに怒りを感じた。

驕った、人を侮蔑する言葉であると感じた。

その冷たい言葉は、時間をかけて目を見張っていると、そのとおりであると感じられていった。

情に厚い暖かい瞳ではなく、冷酷な冷たい瞳の方が人を救うことがある。それを自分自身のこの経験で身をもって知ったのだ。

相手がどう思おうが関係は無い。自分は、自分の意思を口にする。信念を通し、弱者をふみにじる事になろうと、良心が咎めようと、胸を張って言うべきだ。

「勝者として敗者に命じるわ。あなた達を私の傘下に入れる事はない。腐った人間は腐った街に帰りなさい」

腐った人間というのは、ラタの考えた文句である。

良心が心臓を刺激して、心臓をバクバクと動かす。

リーシアが印を切ると、全員の縄が解かれていく。

エイディエル組は立ち上がり、シェールに恨みのこもった視線で一瞥した後、去っていったのだ。

「待ちなさい。チェリンはどうするの？」

いまだに気を失っているチェリンは、彼女らに置き去りにされている。それを見たリーシアは言ったが、アイシャは振り向きもせず

に答えた。

「そんな役立たずじゃない」

シェールは聞いて、面食らった。リーシアはそう聞くと、チェリンを自分で抱き上げた。

「なら、私がもらっちゃっていいかしら？」

エイディエル組は何も答えずに去っていく。リーシアは、チェリンを抱きかかえながら、その姿を見送った。

「仲間を……役立たずって……」

シェールは、当一の家に戻る。アイシャの発した言葉が、シェー

ルにはまだ理解できていないようだ。

「相手の事を『腐った人間』なんて、言っておいて何を？」

リーシアがわざとらしく、くすくす笑いながら言った。

「あなたが言わせたようなものじゃない」

リーシアが薦めたのだ。エイディエルが王になる目的を話させて、スラム街の人間の醜さを傲慢さをシェールに見せた。

ラタの事も利用して、リーシアがシェールにそう言わせるように導いたのだ。

「あなたの口から出た言葉は、どこまでいってもあなたの言葉、王になろうと考えているなら、人にそそのかされたなんて、言い訳にならないわ」

王には責任がある。そう言ってシェールの言葉をかわしてリーシアは、チェリンの事を抱えながら屋根裏部屋に向かっていった。

「……ったく。狐か狸と話している気分だわ……」

シェールは、風呂場に向かっていく。

「待ってください」

ラタがシェールの肩を掴んで止める。

「私に先に入らせてください」

今回の戦いの功労者は、リーシアの次にラタであろう。そう考えると、シェールはラタの事を先に入れる事にした。

「お二人で入ればよろしいのでは……？」

ノエリアがその二人にそう声をかけてくるが、シェールとラタは、二人でノエリアの事をものすごい勢いで睨み、ノエリアの事を黙らせた。

エピソード 2

リーシアが、巨大な籠を抱えて廊下を歩いているのを見つけた当一は思う。

『あ……やっぱり』

チェリンの事をこの家に住まわせることを、祥子に交渉すると予想通りの返答が帰ってきたのだろう。

「バンテリンの増産か？ 今度は3〜4倍くらいの要求を受けたんだろう？」

薬の増産を条件に、祥子がチェリンを家に住まわせる事を了承するだろう。そういう結末になるのはわかりきっていた。

「これからは花粉の季節だからね。鼻炎止めを作るようにいわれたわ。お風呂のお湯は抜かないでおいでね。帰ってきたら入るから」
リーシアは植物採集に使っている、いつもの山まで向かった。
った。

「ラタ様！ ラタ様！」

ノエリアの声が、当一の家に響いた。

廊下でばったりとノエリア会った当一。ノエリアの方から、当一に聞いてきた。

「ラタ様を見かけませんでしたか？」

あの出不精が外に出るなど意外な事であった。

「抜け殻が、置いてあるだけで、中身が見つからないのですわ」

「抜け殻？」

ノエリアが言うので、当一は日当たりのいいリビングの窓際を見てみた。

そこには、ラタの着ていた鎧が、天日に干されていたのだ。

太陽の光を浴びて、乾かされている鎧のしたには新聞が敷いてあった。

「シュールだな……」
とてつもなくシュールな光景である。

ラタは調べて、近くにあるスラム街などと噂をされる場所にやってきた。

だが、ラタの目には、自分がレイグネンで見ってきたような腐臭の放つ場所ではないように思える。

道端に露天があったり、ガラの悪い喧騒も聞こえる。身秩序な街であるのが分かる。だがそれだけだ。

ゴミが散乱していたり、ましてや、人間の死体が放置をされているなどという事はない。

スラム街などという表現は、あまりにも大げさすぎると、ラタは思う。

「なんで、あんな場所が生まれるのでしょうか……？」
自分がレイグネンで見たスラム街とは、どう考えても同列ではない。

レイグネンでは、なんであんな場所ができるのだろうか？ あそことここの違いとは何なのだろうか？

世界が根幹の部分から違う日本とレイグネンでは、こういう形で世界の差が現れる。

「政治、経済、教育、その他もろもろ……そういった根幹の部分がこの国とレイグネンでは違うのよ」

リーシアが言う。

ラタの事を追ってここまでやってきたリーシアは、ラタには見つかからないようにして、建物の影に隠れながら、隣に立つ相手に言った。

「よくもまあ、そんな籠を背負いながらウザいドヤ顔ができるわね」
シェールは、籠を抱えながら言うリーシアに言う。

「ラタが悩んでいる事は、本来ならば、あなたが悩むべきことよ」

メゲないリーシアはそれでも言葉を続けた。
それで、ムツつとしたシェールだが、リーシアの言葉を聞き続ける。

王になれば、政治経済を握る事になる。

ラタが悩んでいる、スラム街の事をどうするか？ その全権を握る事もできるのがシェールなのだ。

「エイディエルみたいに、潰そうと考えるか？ それともラタみたいに何とかしようと思えるか？」

リーシアはラタに視線を向けた。

ラタは道端に落ちている空き缶を見つけた。

それを見ているとさびしくなる。

自分の知っているスラム街は、ゴミの散乱している場所であった。それに一つでも近いものを見てしまうと、実はこの場所も、レイグネンのスラム街と、同じなのではないかと思ってしまう。

『そんな事はないはずです……あんな場所は存在しないほうがいいはずです』

ラタは空き缶を拾う。

日本にやってきてから、ゴミ一つないきれいな街ばかりを見てきたラタには、空き缶一つであってもこの街の汚れのように感じてしまう。

ゴミ掃除をする事は、その街で暮らす人間を綺麗にすることではないのであろうか？

そんな考えもよぎってくる。

ラタは、自分の手に持った空き缶一つに、深い悲しみを帯た視線を送っていた。

それを見ていたリーシアは、エイディエルに目を向けた。

「あなたしだいよ」

それからリーシアは、籠を背負ったまま薬草集めに向かっていっ

た。

エピローグ 3

リーシアは薬草を集めるとき、いつも、空き地の様子を見る事にしている。

たまに、その場所にこの山の所有者だという女の子が座っているのだ。

今日はそこに居た。いつもどおり、その広場の隅っこに座っていたのだ。

その女の子は、一美の姿を見ると、

「やっぱり来たか？ 有名になってるぞ。この辺では、バンテリン少女のリンリンちゃんとか呼ばれてる」

「リンリン！ その名前は一体どこで聞いたの？」

「様子さんがそう言ってみんなに紹介しているんだ」

「その名前って様子さんにも浸透していたのね……」

『シェールめ……』と、小さくつぶやくリーシアに、女の子は続けて聞いてきた。

「そういえば、お前は学校に通っているのか？」

「来週から菜琴中学校という所に通う手はずになっているわ」

リーシアは、様子からその事は聞いていた。この国では、十四歳であれば中学二年生として学校に通い、勉学に励むのが義務なのであるという。

「私と同じ学校だ」

それを聞いた女の子は、笑顔になりながら言うてくる。

「一緒のクラスになるといいな」

リーシアはそれに、笑顔で返した。

「そうね」

その後、とりとめのない話をした後、リーシアは薬草集めに戻っていく。

「今日より、このクラスに転入することになったシェール・グスターク君だ」

朝のホームルームの時間、教師がそう言うと、菜琴中学校の二年二組にやってきた転入生のシェールはお辞儀をした。

きれいな白髪に、赤い瞳の転校生。

物珍しさから、すぐにシェールは人気者になった。

昼休みになると、当一の後ろにある、シェールの席の周りには人だかりができた。

人当たりの悪くないシェールは、すぐにこのクラスに馴染んでいく。

二年一組の、一番後ろの席に、紫色の髪をした女の子が髪を弄りながら座っている。

リーシアは、普段からローブのようなゆったりとした服ばかり着ているため、学校の制服を着て落ち着かない気分であった。

今日は、髪をいじったり、襟元を直したりと、そわそわしながら、過ごしていた。

「一緒のクラスになれて、よかったな」

休み時間に、リーシアの前の席に座っている一美がリーシアに向けて言った。

リーシアには近づきたい雰囲気がある。休み時間に、彼女の周りにひとだかりができるような事はなかった。

だが、一美という友人を得て、順調に学校生活を始めている。

二年三組には、突然の来訪者に驚いている女の子がいた。

『なんで……よりによって、あいつがこのクラスにやってくるんスカ……？』

その女の子は、ラタがシェールの仲間であることを、まだ知らなかった。

黙っていれば気づかれないだろう……その頃は、まだそう考えて

おり、ごまかし切るつもりでいたのだ。

メイディーとディーリアは同じ二年四組になり、ノエリアは五組にいく事になった。

一部、波乱含みの学校生活の始まりである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415r/>

シェールのシュヴァリエ 2

2011年5月23日03時40分発行